

日本企業の貿易建値通貨選択
—税関データを集計した各国別インボイス通貨シェアからわかること—

学習院大学経済学部教授、財務省財務総合政策研究所特別研究官
清水 順子

コロンビア大学教授、政策研究大学院大学客員教授・名誉教授
伊藤 隆敏

横浜国立大学国際社会科学研究院教授、財務省財務総合政策研究所客員研究官
佐藤 清隆

中央大学経済学部准教授、財務省財務総合政策研究所客員研究官
吉見 太洋

財務省財務総合政策研究所総務研究部主任研究官
安藤 健太

財務省財務総合政策研究所総務研究部研究官
吉元 宇楽

2022年12月

2023年4月修正

本論文の内容は全て執筆者の個人的見解であり、財務省あるいは財務総合政策研究所の公式見解を示すものではありません。

※2023年4月7日をもって、分析に用いた輸出入申告データの見直しに伴う本文の記載及び図表の修正を行いました。

日本企業の貿易建値通貨選択

—税関データを集計した各国別インボイス通貨シェアからわかること—^{*1}

清水 順子^{*2}

伊藤 隆敏^{*3}

佐藤 清隆^{*4}

吉見 太洋^{*5}

安藤 健太^{*6}

吉元 宇楽^{*7}

要 約

財務省が公表してきた貿易相手地域別の貿易建値通貨（インボイス通貨）シェアは日本企業が輸出入でどのような通貨選択をしているかの推移を見るにあたって有用なデータであるが、個々の国別の統計は公表されていない。

本稿では、税関の輸出入申告における個票データから各国別の貿易建値通貨シェアを金額ベースと取引件数ベースの両方で半期ごとに算出した。この作業を通じて、日本の輸出及び輸入における貿易建値通貨シェアの推移を相手国別に示し、円建て、ドル建て、相手国通貨建てシェアのそれぞれがどのように変化してきたかを考察した。

集計・分析の結果、財務省の公表資料や、過去のアンケート調査（伊藤、他、2010, 2011, 2015, 2016, 2017, 2019）によっても分からなかった貿易建値通貨比率の変化がみられることが確認された。また、金額ベースと取引件数ベースの間で貿易建値通貨シェアが大きく異なるケースが数多く観察された。これは特定の通貨が比較的高額な取引や少額な取引に偏って使用されていることを示す新たな発見であり、各国別の貿易建値通貨シェアをデータとして整備し、分析することの意義を確認することができた。

今後の研究において、貿易相手国に加え、貿易財の種類（品目別や工程間別）や貿易相手（企業内貿易か、企業間貿易か）、相手国通貨の変動等の情報を基に貿易建値通貨選択の決定要因に迫ることが課題となる。

キーワード：貿易相手国別インボイス通貨比率、貿易建値通貨選択、輸出入申告データ

JEL 区分：F23, F31, F33

^{*1} 本稿の執筆にあたって、財務省関税局関係各位に多大なるご協力をいただいた。特に、板垣和憲氏（財務省関税局関税課課長補佐）、成田雄治氏（同前企画第一係長）、澤田駿氏（同企画第一係長）には、輸出入申告データの取り扱いや解釈について多くの有益なご助言をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表したい。なお、本研究は、「財務総合政策研究所との共同研究における輸出入申告情報利用に係るガイドライン」に基づき財務省に利用申し出を行い、2022年2月に承諾を受け、財務総合政策研究所と共同で実施した研究の成果である。本論文の見解は執筆者個人の責任において発表するものであり、財務省及び財務総合政策研究所の公式見解を示すものではない。

^{*2} 学習院大学経済学部教授、財務省財務総合政策研究所特別研究官

^{*3} コロンビア大学教授、政策研究大学院大学客員教授・名誉教授

^{*4} 横浜国立大学国際社会科学研究院教授、財務省財務総合政策研究所客員研究官

^{*5} 中央大学経済学部准教授、財務省財務総合政策研究所客員研究官

^{*6} 財務省財務総合政策研究所総務研究部主任研究官

^{*7} 財務省財務総合政策研究所総務研究部研究官

I. はじめに

財務省はこれまで貿易相手地域別の貿易建値通貨（インボイス通貨）シェアを半期ごとに公表している。これは、日本企業が輸出入でどのような貿易建値通貨を選択しているかの推移が分かる貴重なデータである。一方で、地域別に集計された情報は、貿易額の多い地域での主要通貨利用の影響が強くでてしまい、個別の貿易相手国に対して円建てや貿易相手国通貨の利用がどの程度あるのかという情報を把握することができない。特に人民元をはじめとするアジア現地通貨利用が当該国との貿易において近年顕著に観察されるものの、アジア全体のデータとして集計したデータでは、その実態を正確には把握できなかった。

日本企業のインボイス通貨選択については、清水、他（2021）、Ito et al. (2018)、Ito et al. (2021)などの研究において、「日本は先進国でありながら（アジアの新興国相手の貿易でも）円建て利用が少なく、ドル建て利用が多いのはなぜなのか」という謎を明らかにすべく、企業インタビューやアンケート調査を行ってきた。その結果、海外現地法人とのサプライチェーンが拡大する中で、企業内貿易をドル建てに統一し、本社財務部がまとめて為替リスク管理を行うという為替リスク管理上の理由が主な要因であることが指摘された。しかし、アンケート調査のサンプルや回答率には限界がある。輸出入申告データを基に貿易相手国別で貿易建値通貨シェアを集計し、分析することができれば、円建て利用の詳細な実態、すなわち1980年代以降促進された円の国際化が現時点で実際にどの程度普及しているのか、またその要因は何かを明らかにすることができる。

更に、コロナ禍のサプライチェーン再編に伴い、貿易財の内容の変化（自動車関連部品の減少と、電子部品の増加）や企業内貿易の減少、最終消費地の変更が、今後の貿易建値通貨の選択に影響を与える可能性がある。国別の貿易建値通貨シェアの情報が利用可能となれば、貿易取引に新たに参入する企業にとって貴重な参考情報となることが期待される。

本研究では、税関の輸出入申告における個票データから各国別の貿易建値通貨シェアを金額ベースと件数ベースの両方で算出し、円建て、ドル建て、相手国通貨建てシェアのそれぞれが貿易相手国別にどのように変化してきたかを考察することで、今後の企業の通貨リスク管理や政府の国際金融政策などを考えるための有益な情報を提供する。

本稿の構成は以下のとおりである。II. では、日本企業のインボイス通貨選択の特徴について財務省が公表しているデータを概観し、先行研究との整合性を議論する。III. では本稿で行う貿易相手国別の貿易建値通貨シェアデータの算出とサンプル国について説明する。IV. では、結果の概要について解説し、V. では貿易相手国別の詳細な結果について紹介する。VI. では、本研究の結果を踏まえた政策インプリケーションと今後の課題について述べる。

II. 日本企業の貿易建値通貨選択の特徴

円の対ドル名目為替レート（以下、「円ドル相場」）は、1971年のブレトンウッズ体制終焉から2012年までの長期にわたって、短期的には変動しながらも、円高傾向を示していた¹⁾。この為替レートの変動がもたらす為替リスクに日本企業は対峙してきた。為替相場の変動が輸出入価格に与える影響は、特に短期的には貿易建値通貨としてどの通貨を使っているかによって大きく異なる。日本企業が円建て輸出を選択するのであれば、相手側が為替リスクを負うことになるので、為替相場変動の影響は受けない。これは、輸出企業が為替変動を輸出相手に完全に転嫁（パススルー）することを意味する。この完全なパススルーのケースとは異なり、日本企業が米ドル建て（あるいは相手国通貨建て）で輸出する場合は、相手国での米ドル建て（あるいは相手国通貨建て）販売価格は安

¹⁾ ただし、実質実効為替レートのピークは1995年だった。

定するが、為替変動による差益や差損は日本の輸出企業が負うことになる。パススルーがゼロとなるこのケースは、現地通貨建て輸出価格安定化行動（Pricing to market, PTM行動）と呼ばれている。

具体例をあげてみよう。円安ドル高局面において、ドル建てで輸出している場合、円での受取額は「ドル建て輸出価格×円ドル為替相場」と等しくなるため、円安によって円換算した収入が増加し、企業業績に好影響を与え、株価上昇が期待できる。一方、ドル建てで輸入している場合は、円での支払額が「ドル建て輸入価格×円ドル為替相場」に等しくなるため、円安によって輸入代金が増加する。この輸入金額の増加が消費者価格に転嫁されればコストプッシュのインフレとして問題になる。このように、貿易建値通貨選択と為替レートのパススルー（もしくはPTM行動）は相互に関連して企業収益や国内物価に大きな影響を与えうる。以下では、貿易建値通貨選択に焦点を当てて分析を行う。

貿易建値通貨選択についての先行研究として、Grassman (1973, 1976) の「グラスマンの法則 (Grassman's law)」がある。そこでは、第一に、先進国間で工業製品が取引される場合に輸出国通貨建てで取引される傾向があることが指摘された。これは「定型化された事実1」として、以下のように整理することができる。

【定型化された事実1】 先進国間で行われる工業製品の貿易は輸出国通貨建てで取引される。

また、先進国と途上国間の取引においては先進国通貨建てで取引される傾向があることも指摘している (Grassman (1973), Page (1977, 1981))。先進国が製造業製品を途上国に輸出する場合、先進国の方が有利な立場で途上国との輸出契約交渉を行えると考えれば、このインボイス通貨選択の傾向は理解しやすいだろう。これは、「定型化された事実2」として、以下のように整理することができる。

【定型化された事実2】 先進国から途上国に製造業製品が輸出される場合、先進国の通貨で取引される。

さらに、インボイス通貨選択の産業別・品目別の違いについて、McKinnon (1979) が重要な仮説を提示している。これは、「定型化された事実3」として、以下のように整理することができる。

【定型化された事実3】 差別化された財の輸出は輸出国通貨建てで取引される。原油などの同質的な財は基軸通貨建て（米ドル建てで）取引される。

日本はこれらの定型化された事実には当てはまらない、特異な国であることで知られている。表1は、1980年、2000年、2019年のそれぞれにおける、主要6か国の輸出入総額に占める、自国通貨建てシェア、米ドル建てシェアを示している。これによると、日本は他国と比較して自国通貨建てシェアが輸出、輸入ともかなり低く、ドル建てシェアが高いという特徴があり、それがさほど変化していないということがわかる。2019年時点で日本の輸出の49.7%がドル建てで行われており、円建てシェアを12ポイントほど上回っている。この傾向は日本の輸入において特に顕著であり、2019年時点で日本の輸入における円建てシェアはわずか25.5%にとどまっており、67.4%がドル建てで取引されている。主要国の自国通貨建てシェアを比べると、ドイツはマルクの時代から自国通貨建てシェアが高く、輸出入とも75%を上回っている。ユーロ導入前には自国通貨建てシェアが低かったフランスやイタリアでも、単一通貨ユーロの恩恵を受け、自国通貨建てシェアは7割を上回っている²⁾。米

²⁾ 表1においてドイツ、フランス、イタリアのユーロ建てシェアが高いが、これはユーロ圏内の貿易も含めてインボイス通貨シェアを計算している可能性がある。だとしても、ユーロ圏諸国の自国通貨（ユーロ）建て輸出シェアは日本の円建て輸出シェア

国に至っては基軸通貨国特権として95%という高いシェアで自国通貨である米ドル建てで輸出入を行っている。彼らが為替リスクを意識しなくてもよい状況にあるのとは異なり、日本企業は円建てではなく、相手国通貨建てで貿易し、為替の変動で非常に苦労してきたことが窺える。

表1 米国・ドイツ・日本のインボイス通貨選択比率 (%)

	輸出					
	自国通貨建て比率			米ドル建て比率		
	1980	2000	2019	1980	2000	2019
米国	97.0	96.1†	95.7 _P	97.0	96.1†	95.7 _P
日本	28.9	36.1	37.2	66.3	52.4	49.7
ドイツ	82.3	72.0‡	75.9	7.2	17.1‡	17.7
英国	76.0	50.0	37.7	17.0	29.0	32.7
フランス	62.5	75.6	72.3	13.2	21.0	22.0
イタリア	36.0	75.2* _‡	82.3 _P	30.0	18.1* _‡	14.1 _P

	輸入					
	自国通貨建て比率			米ドル建て比率		
	1980	2000	2019	1980	2000	2019
米国	85.0	93.2†	95.1 _P	85.0	93.2†	95.1 _P
日本	2.4	23.5	25.5	93.1	70.7	67.4
ドイツ	43.0	72.7‡	77.4	32.3	18.7‡	20.2
英国	38.0	47.0	24.8	29.0	34.0	43.6
フランス	34.1	74.9	74.2	33.1	21.0	23.4
イタリア	18.0	71.0* _‡	71.2 _P	45.0	24.9* _‡	25.9 _P

(出所) 清水、他 (2021) 第1章、表1-1より抜粋。

次に、財務省が公表している日本の地域別の貿易建値通貨シェアデータから貿易相手地域・国別にインボイス通貨シェアの変化を見てみよう。まず日本の対米輸出をみると、ドル建てシェアが圧倒的に高い。例えば、2022年前期において、日本の対米輸出の84.9%がドル建てで取引されており、円建てシェアはわずか14.8%にとどまっている (図1-1)。この状況は統計が利用可能な1987年から全く変わらない。ドルが世界の基軸通貨としての地位を保っていることが、対米輸出におけるドル建てシェアの高さの理由と言えるであろう。日本のインボイス通貨選択は、対米輸出においても定型化された事実1に反している。また、図1-2が示すように、日本の米国からの輸入においても70%以上がドル建てで取引されている。円建てシェアも1990年代と比較すれば緩やかな上昇をみせてはいるが、2022年前期においても円の使用は21.6%にとどまっている。

日本企業の輸出でドル建てが多い理由としては、清水、他 (2021)、Ito et al. (2018)、Ito et al. (2021)によれば以下二点が指摘される。第一に、海外現地法人とのサプライチェーンが拡大する中で、企業内貿易をドル建てに統一し、本社財務部がまとめて為替リスク管理を行うという為替リスク管理上の理由である。第二に、日本企業が直面している海外市場での熾烈な価格競争である。競争相手は欧米企業だけではない。韓国や台湾といったアジア企業も競争相手であり、円ドル相場が変動するたびに価格を変更するわけにはいかない。そこで、日本企業はできるだけ現地の販売価格を安定化させ、市場シェアを確保しようとするPTM行動をとる傾向にある。このPTM戦略は日本と欧州との間の貿易において観察される。日欧それぞれの輸出において相手国通貨建てシェアが高

よりも高いことに変わりはない。

い。日本から欧州向けの輸出におけるユーロ建てシェアは5割以上、欧州から日本向けの輸出（日本の輸入）における円建てシェアは2000年代以降上昇傾向にあり、2022年前期には60.9%と初めて6割台になった。

日本の対アジア輸出では円建てシェアとドル建てシェアがほぼ拮抗した状態で推移しており、この状況は統計が利用可能な1987年から現在まで変わらない。アジア向け輸出のほとんどは円とドルという2つの先進国通貨で取引されているわけだが、円建て輸出シェアが50%を下回り、ドル建てシェアと拮抗している状況は、円とアジア通貨以外の第三国通貨が多く使われているという点で、定型化された事実2に反している。日本のアジアからの輸入ではこの傾向がさらに強くなる。ドル建てシェアは1990年代と比較すれば徐々に減少傾向にあり、2019年以降は7割台を割り込んでいるものの、円建てシェアが高くなっているわけではない。ドル建てシェアの減少を相殺するように上昇しているのは、アジアの現地通貨建てシェアである。アジアとの貿易において人民元建てやタイバーツ建てなどアジア現地通貨建てのデータが登場してきたのは2012年からであるが、2012年後期に0.5%だった人民元建て輸出シェアは2022年前期には4.1%まで上昇している。タイバーツ建ては1%前後で変化があまり見られない。このシェアだけを見ると、アジア貿易においてアジア現地通貨建て取引はほとんど使われていないと見なされてしまうが、それは早計である。このシェアは当該国間の貿易ではなく、対アジア貿易全体におけるシェアとして算出されているため、過小評価されがちである。地域別ではなく、二国間貿易において円や現地通貨がどれほど使われているのかを正確に把握することは、今後の企業の通貨リスク管理や政府の国際金融政策などを考えるうえで重要であり、そこに本研究の貢献がある。

図1-1 貿易取引通貨別比率<輸出>

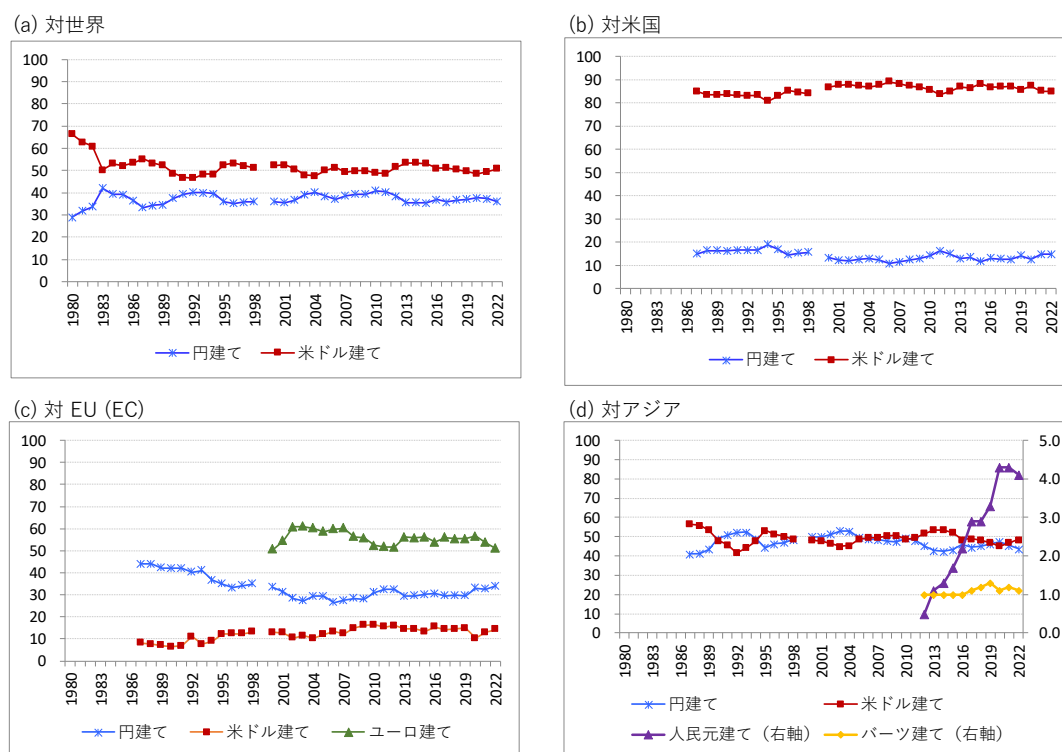
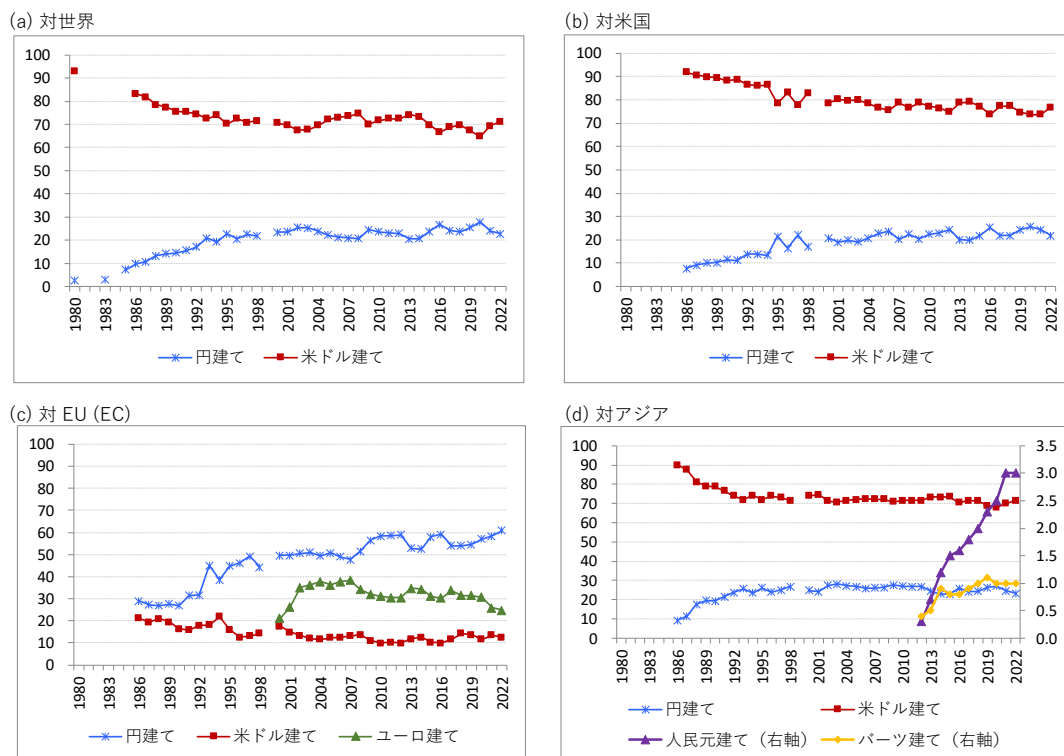


図1-2 貿易取引通貨別比率<輸入>



(出所) 日本銀行「輸出信用状統計」、日本銀行「輸入承認届出報告書」、大蔵省「報告省令に基づく報告」、通産省「輸出確認統計」、通産省「輸入報告統計」、通産省「輸出報告書通貨建動向」、通産省「輸入報告書通貨建動向」、通産省「輸出決済通貨建動向調査」、通産省「輸入決済通貨建動向調査」、財務省「貿易取引通貨別比率」より作成。

(注1) データは半期ごとの数値で公開されているが、ここでは各年の後期のデータを用いている。2022年のデータのみは2022年前期のデータである。

(注2) 輸入の1999年のデータは存在しない。対EU(EC)輸入の欧州通貨建て比率が2000年と2001年で低い理由は、財務省のデータ公表の方法にある。財務省は上位5通貨のみの情報を公表し、それ以外は「その他通貨」に一括している。2000年時点でその他通貨の比率が11.7%に達しており、ユーロ発足直後はまだ欧州各国の通貨が使われていることを反映している。

III. 貿易相手国別の貿易建値通貨シェアデータについて

本研究は、「経済財政運営と改革の基本方針2021」（令和3年6月18日閣議決定）等において、データの最大限の利活用を図ることとされていること等を踏まえ、財務省が令和3年度に公募した「輸出入申告データを利用した共同研究」の一つである。輸出入申告等に基づき税関が保有する輸出入申告の個票データ（2014年から2020年）を貿易相手国別にデータ項目にある「インボイス通貨コード」毎に仕分け、貿易建値通貨シェアを算出する。輸出入それぞれの要領は以下のとおりである。

(ア) 輸出については、仕向け国コード毎にそれぞれ利用されているインボイス通貨コード別に取引件数（申告欄数を採用。以下同じ。）と申告価格の合計を算出する。

(イ) 輸入については、原産国コード毎にそれぞれ利用されているインボイス通貨コード別に取引件数と関税課税標準額の合計を算出する。

上記のデータをもとに、国別に主要通貨（米ドル・円・ユーロ）と当該国通貨の貿易建値通貨シェアを金額ベースと件数ベースの両方で年次で算出し、国別の貿易建値通貨シェアの2014年から

2020年までの推移を見る³⁾。

サンプル国としては、2020年の輸出入の貿易相手国ランキングの上位34か国を用いる。表2、表3はそれぞれ、輸出、輸入の上位34か国の名前と貿易シェアをまとめたものである。輸出相手国では中国が1位で22.07%である。2位には米国（18.44%）が入るが、3位以降は韓国（6.97%）、台湾（6.93%）、香港（4.99%）、タイ（3.98%）、シンガポール（2.76%）とアジア勢が続き、上位34か国で輸出全体の95%弱を占める。

輸入相手国では中国が1位で25.77%と2位の米国（10.95%）を大きく引き離している。3位はオーストラリア（5.63%）で4位以降は輸出と同様に台湾（4.21%）、韓国（4.18%）、タイ（3.74%）、ベトナム（3.46%）とアジア勢が続き、サウジアラビア（2.89%）やアラブ首長国連邦（2.56%）といった産油国が10位以内にランクインしている。上位34か国で輸出全体の93%強を占める。

³⁾ 貿易建値通貨シェアを年次ベースで集計した理由は、その期間に行われた金額の大きい輸出入申告によってシェアの算出が影響される度合いが月次や半期ベースよりも小さくなるからである。

表2 2020年の輸出相手国ランキング
(単位：1000ドル,%)

ランキング	国名	集計	シェア
1	中国	141,250,228	22.07%
2	米国	117,998,858	18.44%
3	韓国	44,587,147	6.97%
4	台湾	44,326,213	6.93%
5	香港	31,947,803	4.99%
6	タイ	25,469,579	3.98%
7	シンガポール	17,640,049	2.76%
8	ドイツ	17,538,203	2.74%
9	ベトナム	17,088,307	2.67%
10	マレーシア	12,569,861	1.96%
11	オーストラリア	12,117,894	1.89%
12	オランダ	10,890,745	1.70%
13	英国	10,698,313	1.67%
14	インドネシア	9,153,703	1.43%
15	インド	9,091,201	1.42%
16	フィリピン	8,787,896	1.37%
17	メキシコ	8,375,102	1.31%
18	カナダ	7,228,848	1.13%
19	ベルギー	6,540,010	1.02%
20	ロシア	5,870,453	0.92%
21	フランス	5,635,608	0.88%
22	アラブ首長国連邦	5,544,442	0.87%
23	スイス	4,819,440	0.75%
24	パナマ	4,576,599	0.72%
25	サウジアラビア	4,228,529	0.66%
26	イタリア	3,770,360	0.59%
27	ブラジル	2,948,566	0.46%
28	ポーランド	2,853,711	0.45%
29	トルコ	2,663,466	0.42%
30	スペイン	2,156,720	0.34%
31	リベリア	2,152,908	0.34%
32	ニュージーランド	1,841,372	0.29%
33	南アフリカ共和国	1,667,207	0.26%
34	ハンガリー	1,582,988	0.25%
	その他	34,337,244	5.37%
	総計	639,949,573	100.00%

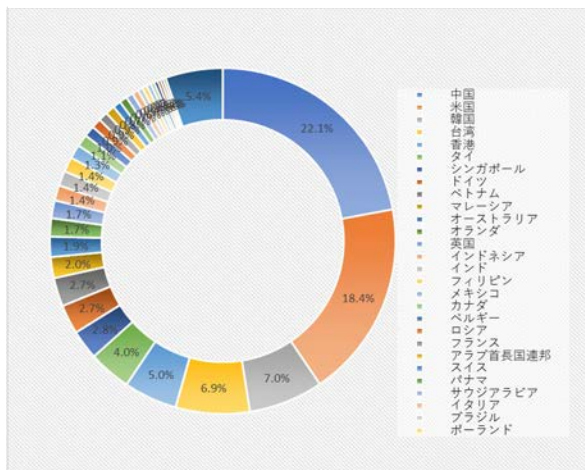
(出所) JETRO地域別貿易概況

表3 2020年の輸入相手国ランキング
(単位：1000ドル,%)

ランキング	国名	集計	シェア
1	中国	163,842,431	25.77%
2	米国	69,625,747	10.95%
3	オーストラリア	35,784,604	5.63%
4	台湾	26,762,045	4.21%
5	韓国	26,557,825	4.18%
6	タイ	23,753,550	3.74%
7	ベトナム	22,025,435	3.46%
8	ドイツ	21,273,953	3.35%
9	サウジアラビア	18,384,592	2.89%
10	アラブ首長国連邦	16,305,587	2.56%
11	マレーシア	15,898,744	2.50%
12	インドネシア	15,477,546	2.43%
13	カナダ	10,931,577	1.72%
14	ロシア	10,699,448	1.68%
15	イタリア	10,471,183	1.65%
16	フィリピン	9,362,936	1.47%
17	フランス	9,238,268	1.45%
18	カタール	9,139,655	1.44%
19	シンガポール	8,550,761	1.35%
20	スイス	7,547,358	1.19%
21	ブラジル	7,489,412	1.18%
22	チリ	6,982,832	1.10%
23	アイルランド	6,568,914	1.03%
24	英国	6,403,501	1.01%
25	南アフリカ共和国	5,761,992	0.91%
26	メキシコ	5,433,080	0.85%
27	インド	4,713,717	0.74%
28	クウェート	4,535,828	0.71%
29	ベルギー	3,254,686	0.51%
30	スペイン	3,160,375	0.50%
31	オランダ	3,091,714	0.49%
32	スウェーデン	2,823,070	0.44%
33	ニュージーランド	2,495,429	0.39%
34	ペルー	2,329,383	0.37%
	その他	43,272,395	6.76%
	総計	639,949,573	100.00%

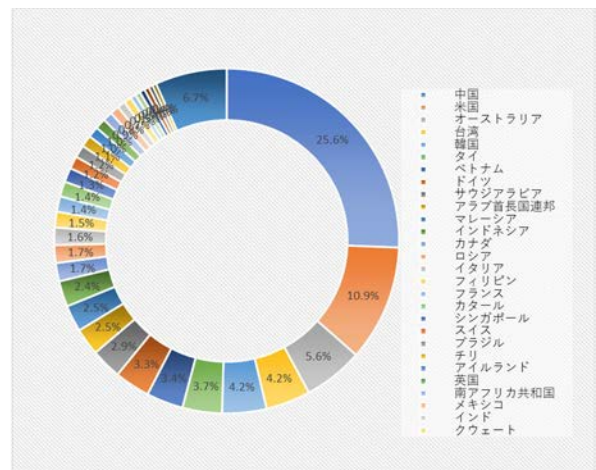
(出所) JETRO地域別貿易概況

図2 輸出相手国上位34か国（2020年）



(出所) JETRO地域別貿易概況

図3 輸入相手国上位34か国（2020年）



(出所) JETRO地域別貿易概況

IV. 結果の概要

まず、輸出入それぞれに分けて結果の概要を説明する。表4は、2020年の輸出における貿易相手国別の通貨建てシェア（円建て、ドル建て、相手国通貨建て）を金額ベースと件数ベースのそれぞれで算出した結果をまとめ、さらに2014年のシェアデータとの差をカッコ内に示したものである。2020年の輸出における貿易建値通貨シェア（金額ベース）の中で米ドル建てシェアが最も高い国（米国を除く）は輸出上位34か国中10カ国、円建ては9カ国、相手国通貨建ては11カ国、その他（ユーロ建て）4カ国となっている。国名は以下のとおりである。

- ・ ドル建て（米国以外）：中国・タイ・インドネシア・シンガポール・フィリピン・ベトナム・インド・スイス・メキシコ・ブラジル
- ・ 円建て：香港・韓国・台湾・マレーシア・ニュージーランド・パナマ・UAE・サウジアラビア・リベリア
- ・ 相手国通貨建て：オーストラリア・米国・英国・ユーロ採用国6カ国・ロシア・カナダ
- ・ ユーロ建て（ユーロ採用国以外）：ポーランド・ハンガリー・トルコ・南アフリカ共和国

米ドル建てシェアが最も高いのは、米国（86.7%）、メキシコ（65.9%）ベトナム（65.4%）であり、円建てシェアが最も高いのはパナマ（66.6%）、サウジアラビア（62.5%）、UAE（60.0%）、米国を除いて相手国通貨建てが最も高いのはスペイン（67.9%）、オランダ（65.3%）、オーストラリア（61.7%）となっている。

2014年のシェアと比較すると、2020年の輸出でシェアが低下した国数が最も多いのはドル建てであり、34か国中22か国でドル建てシェアが低下している一方、円建てシェアは20か国で、相手国通貨建てシェアは23か国で上昇している。2014年から2020年の間でドル建てが減少し、その代わりに円建てと相手国通貨建てが増加する傾向があることがわかる。特にアジアでは、11か国中台湾、ベトナム、インドを除く8か国で米ドル建てシェアが低下し、相手国通貨建てシェアが上昇している。新興国通貨の中で相手国通貨建てシェアの上昇幅が大きいのは、中国（6.8%）、ブラジル（5.7%）、インド（5.3%）である。

金額ベースのシェアと取引件数ベースのシェアでは差が見られる。件数ベースでは円建てシェアが最も高い国が22か国と最多になり、次いで相手国通貨建てシェアが最も高い国が6か国、ドル建てシェアが最も高い国（米国を除く）は4か国にとどまる。特にアジア向けではすべての国で件数ベースでは円建てシェアが最も高くなるという特徴があり、少額取引は円建てで行い、高額な取引はド

ドル建てで行うという傾向があることが示唆される。アンケート調査などによる日本企業の貿易建値通貨選択を分析したIto et al. (2018, 2021)、清水、他 (2021) では大企業ほどドル建てを使う傾向にあることが示されていたが、税関申告データでもこの傾向があることが確認されたのは大きな発見である。2014年のシェアと比較すると、金額ベースと同様に 2020年の輸出でドル建てシェアが低下した国は24か国あり、その多くで相手国通貨建てシェアが伸びている。新興国通貨の中で相手国通貨建てシェアの上昇幅が大きいのは、ブラジル (10.0%)、中国 (9.3%)、ロシア (9.1%) となっている。

表4 相手国別のインボイス通貨シェア（輸出・2020年）

		金額ベースでの通貨シェア（2020年）				件数ベースでの通貨シェア（2020年）			
		米ドル建て	円建て	ユーロ建て	相手国通貨建て	米ドル建て	円建て	ユーロ建て	相手国通貨建て
アジア	中国	47.5% (▲ 9.3%)	41.8% (+2.4%)	0.3% (+0.1%)	10.4% (+6.8%)	36.1% (▲ 9.9%)	49.4% (+0.7%)	0.3% (+0.1%)	14.1% (+9.3%)
	香港	46.2% (▲ 9.0%)	51.5% (+9.0%)	0.2% (▲ 0.0%)	1.8% (▲ 0.2%)	35.4% (▲ 7.5%)	61.9% (+7.0%)	0.3% (▲ 0.0%)	1.5% (▲ 0.1%)
	韓国	34.3% (▲ 6.3%)	59.4% (+3.4%)	0.2% (+0.0%)	6.0% (+3.1%)	23.7% (▲ 3.8%)	69.1% (+0.2%)	0.3% (+0.1%)	6.8% (+3.4%)
	台湾	44.3% (+4.0%)	52.1% (▲ 5.7%)	0.1% (+0.0%)	3.3% (+1.6%)	29.7% (▲ 1.9%)	64.6% (▲ 0.2%)	0.1% (+0.0%)	5.3% (+1.9%)
	タイ	42.5% (▲ 2.6%)	41.6% (▲ 2.1%)	0.3% (+0.1%)	15.5% (+4.5%)	29.7% (▲ 3.3%)	52.7% (▲ 1.6%)	0.3% (+0.2%)	17.1% (+4.6%)
	マレーシア	47.4% (▲ 4.1%)	50.4% (+3.9%)	0.2% (+0.0%)	1.9% (+0.1%)	33.2% (▲ 1.6%)	62.3% (+0.4%)	0.1% (+0.0%)	3.9% (+1.2%)
	インドネシア	54.2% (▲ 3.5%)	39.0% (+1.0%)	0.1% (+0.1%)	6.6% (+2.4%)	43.0% (▲ 5.3%)	48.8% (+0.5%)	0.1% (+0.0%)	7.9% (+4.6%)
	シンガポール	59.2% (▲ 6.3%)	36.7% (+5.7%)	0.5% (+0.1%)	3.4% (+0.3%)	38.2% (▲ 3.1%)	55.7% (+1.8%)	0.4% (▲ 0.0%)	5.6% (+1.3%)
	フィリピン	55.3% (▲ 1.3%)	44.0% (+1.1%)	0.1% (+0.0%)	0.6% (+0.1%)	40.2% (▲ 3.4%)	58.7% (+3.2%)	0.1% (+0.0%)	0.9% (+0.1%)
	ベトナム	65.4% (+4.2%)	34.2% (▲ 4.1%)	0.1% (+0.0%)	0.1% (+0.1%)	45.0% (▲ 0.9%)	54.3% (+0.6%)	0.1% (▲ 0.0%)	0.3% (+0.2%)
	インド	50.6% (+0.6%)	38.7% (▲ 5.4%)	1.0% (▲ 0.4%)	9.6% (+5.3%)	31.6% (▲ 3.5%)	55.5% (▲ 1.4%)	0.4% (▲ 0.0%)	12.4% (+4.9%)
オセア ニア	オーストラリア	15.4% (▲ 10.1%)	22.5% (+2.1%)	0.3% (+0.1%)	61.7% (+7.9%)	16.4% (▲ 0.3%)	55.4% (+6.5%)	0.4% (▲ 0.1%)	27.6% (▲ 6.2%)
	ニュージーランド	13.7% (▲ 4.2%)	46.5% (▲ 5.8%)	0.1% (▲ 0.1%)	36.8% (+14.1%)	5.3% (▲ 2.7%)	71.4% (▲ 15.0%)	0.1% (▲ 0.1%)	21.3% (+17.5%)
欧州	英国	27.0% (+6.0%)	19.9% (+1.1%)	16.1% (▲ 8.6%)	37.0% (+1.4%)	11.7% (+1.8%)	40.6% (+3.6%)	29.5% (▲ 3.4%)	18.2% (▲ 2.1%)
	スイス	48.1% (+8.7%)	21.1% (▲ 11.7%)	4.4% (▲ 2.2%)	26.4% (+5.2%)	14.7% (+6.0%)	59.6% (▲ 1.5%)	16.7% (▲ 1.5%)	9.0% (▲ 3.0%)
	ドイツ	12.0% (▲ 1.3%)	33.7% (▲ 1.1%)	53.7% (+1.9%)	*	10.6% (▲ 0.6%)	43.1% (+1.0%)	46.3% (▲ 0.2%)	*
	オランダ	10.6% (▲ 3.3%)	23.9% (▲ 0.5%)	65.3% (+3.7%)	*	7.9% (▲ 1.1%)	28.4% (+0.3%)	63.1% (+0.4%)	*
	フランス	7.3% (+1.5%)	38.7% (+17.5%)	53.9% (▲ 19.1%)	*	9.2% (+1.1%)	40.3% (+2.2%)	50.5% (▲ 3.3%)	*
	イタリア	11.6% (+3.5%)	34.1% (▲ 7.7%)	53.8% (+4.1%)	*	8.3% (+0.5%)	45.8% (+1.2%)	45.7% (▲ 1.7%)	*
	スペイン	10.8% (+4.2%)	21.2% (+2.0%)	67.9% (▲ 6.2%)	*	6.8% (+1.9%)	44.1% (+11.1%)	49.0% (▲ 13.1%)	*
	ベルギー	7.5% (▲ 3.8%)	36.4% (+7.8%)	56.0% (▲ 3.9%)	*	8.6% (+2.0%)	28.2% (▲ 1.9%)	63.1% (+0.1%)	*
	ロシア	15.1% (▲ 11.5%)	32.1% (+7.9%)	15.7% (+0.4%)	37.2% (+3.3%)	12.9% (▲ 12.4%)	61.8% (+9.5%)	7.6% (▲ 6.2%)	17.8% (+9.1%)
	ポーランド	24.8% (+14.4%)	22.6% (▲ 6.3%)	51.1% (▲ 5.1%)	1.5% (▲ 3.0%)	9.2% (+0.8%)	38.8% (+1.6%)	51.5% (▲ 2.2%)	0.5% (▲ 0.2%)
	ハンガリー	6.7% (▲ 8.6%)	18.7% (+5.2%)	74.6% (+3.5%)	0.1% -	7.6% (▲ 0.2%)	23.9% (+3.5%)	68.3% (▲ 3.2%)	0.0% -
	トルコ	18.0% (▲ 6.8%)	25.7% (▲ 15.9%)	54.5% (+23.2%)	1.8% (+0.3%)	16.3% (▲ 1.3%)	45.1% (▲ 9.1%)	37.1% (+9.4%)	1.5% (+0.9%)
北米 及び 中南米	米国	86.7% (▲ 0.3%)	13.0% (+0.2%)	0.2% (+0.1%)	*	76.1% (▲ 3.1%)	23.7% (+3.0%)	0.2% (+0.0%)	*
	カナダ	43.9% (▲ 8.8%)	9.2% (▲ 1.2%)	0.1% (+0.0%)	46.8% (+10.1%)	51.8% (▲ 4.6%)	27.3% (+4.6%)	0.3% (+0.2%)	20.6% (▲ 0.1%)
	メキシコ	65.9% (▲ 10.8%)	22.0% (+1.4%)	0.4% (+0.3%)	11.7% (+9.1%)	69.5% (▲ 11.4%)	23.6% (+6.6%)	0.2% (+0.1%)	6.8% (+4.7%)
	パナマ	33.4% (+5.0%)	66.6% (▲ 5.0%)	0.0% -	0.0% -	18.4% (▲ 27.1%)	81.0% (+27.0%)	0.4% (+0.1%)	0.0% -
	ブラジル	50.5% (▲ 10.6%)	39.7% (+4.9%)	0.9% (+0.2%)	8.9% (+5.7%)	46.2% (▲ 13.0%)	39.2% (+3.0%)	0.7% (+0.2%)	13.9% (+10.0%)
その他	アラブ首長国連邦	35.2% (+4.6%)	60.0% (▲ 6.1%)	3.4% (+0.4%)	1.4% (+1.0%)	25.5% (+0.1%)	72.8% (▲ 1.1%)	1.1% (+0.5%)	0.6% (+0.5%)
	サウジアラビア	35.8% (▲ 1.7%)	62.5% (+1.1%)	1.3% (+0.6%)	0.2% (▲ 0.0%)	63.8% (+0.4%)	33.7% (▲ 1.3%)	2.0% (+0.9%)	0.3% (▲ 0.1%)
	南アフリカ共和国	14.1% (+1.9%)	38.2% (+6.8%)	38.4% (▲ 4.1%)	9.2% (▲ 4.8%)	16.8% (+5.2%)	47.8% (▲ 1.8%)	24.3% (+1.5%)	10.9% (▲ 5.0%)
	リベリア	41.0% (▲ 15.2%)	58.9% (+15.2%)	0.1% -	0.0% -	1.0% (▲ 4.7%)	96.0% (+4.7%)	2.4% (▲ 0.4%)	0.0% -

(注) ()内の数値は2020年と2014年のインボイス通貨シェアの比較(差)を表す。*印は相手国通貨建てがドル建て、あるいはユーロ建ての欄に記入されている。-印は実績がないか、数値が僅少等の理由で、割合としての記載が困難なものである。

表5は、2020年の輸入における貿易相手国別の通貨建てシェア（円建て、ドル建て、相手国通貨建て）について表4と同様にまとめたものである。2020年の輸入における貿易建値通貨シェア（金額ベース）の中でドル建てシェアが最も高い国（米国を除く）は輸入上位34か国中17か国、円建ては15か国、相手国通貨建ては2か国となっている。国名は以下のとおりである。

- ・ ドル建て（米国以外）：中国・台湾・タイ・マレーシア・インドネシア・ベトナム・インド・オーストラリア・ロシア・カナダ・メキシコ・ブラジル・UAE・サウジアラビア・クウェート・カタール・南アフリカ共和国
- ・ 円建て：香港・韓国・シンガポール・フィリピン・ニュージーランド・スイス・英国・ユーロ採用国6か国・スウェーデン・チリ
- ・ 相手国通貨建て：米国・オランダ

輸入において米ドル建てシェアが最も高いのは中東の産油国4か国であり、すべて95%以上である。産油国以外でドル建てシェアが高いのは、南アフリカ共和国（77.1%）、ブラジル（76.3%）、ロシア（74.3%）であり、すべて資源関連の輸入である。円建てシェアが最も高いのはアイルランド（77.4%）、スウェーデン（74.8%）、チリ（70.4%）であり、特に欧州からの輸入は円建てシェアが高い傾向にある。米国を除いて相手国通貨建てシェアが最も高いのはオランダ（43.8%）である。

2014年のシェアと比較すると、2020年の輸入でシェアが低下した国数が最も多いのはドル建てであり、34か国中23か国でドル建てシェアが低下している。次いで相手国通貨建てシェアは14か国（米国を除く）で低下している。反対に、円建てシェアは24か国で上昇しており、輸入では2014年から2020年の間でドル建てが減少し、その代わりに円建てが増えている傾向があることがわかる。特に欧州からの輸入では、11か国中8か国で円建てシェアが上昇している。円建てシェアの上昇幅が大きいのはイタリア（21.0%）、シンガポール（17.3%）、スイス（15.7%）となっている。

輸出と同様に、金額ベースのシェアと取引件数ベースのシェアでも差が見られる。件数ベースの通貨シェアではドル建てシェアが最も高い国が21か国と最多になり、次いで円建てと相手国通貨建てが最も高い国がそれぞれ6か国、7か国（米国を除く）となる。輸出のケースとは異なり、少額取引はドル建て、高額な取引は円建てという傾向があることが示唆される。2014年のシェアと比較すると、金額ベースと同様に2020年の輸入でドル建てが低下した国は20か国あり、その多くで円建てシェアが伸びている。相手国通貨建てシェアはあまり上昇していないが、その中でも新興国通貨の中で相手国通貨建てシェアの上昇分が大きいのはタイ（3.5%）、中国（3.2%）となっている。

表5 相手国別のインボイス通貨シェア（輸入・2020年）

		金額ベースでの通貨シェア（2020年）				件数ベースでの通貨シェア（2020年）			
		米ドル建て	円建て	ユーロ建て	相手国通貨建て	米ドル建て	円建て	ユーロ建て	相手国通貨建て
アジア	中国	72.7% (▲1.6%)	21.4% (▲0.7%)	0.5% (▲0.5%)	5.1% (+2.9%)	72.5% (▲3.6%)	20.6% (+0.7%)	0.8% (▲0.1%)	5.5% (+3.2%)
	香港	14.3% (▲0.5%)	84.0% (+1.4%)	0.2% (▲0.5%)	0.9% (+0.3%)	59.7% (▲3.5%)	29.3% (+3.1%)	2.1% (+0.2%)	6.3% (+0.2%)
	韓国	37.4% (▲4.3%)	58.7% (+3.2%)	0.2% (▲0.0%)	3.5% (+1.1%)	29.9% (+1.3%)	62.5% (▲1.6%)	0.4% (+0.1%)	7.1% (+0.3%)
	台湾	73.1% (+2.5%)	24.0% (▲2.5%)	0.2% (+0.1%)	2.6% (+0.1%)	61.9% (+2.9%)	31.3% (▲3.2%)	0.5% (+0.1%)	5.9% (+0.2%)
	タイ	49.8% (▲2.9%)	35.9% (▲0.2%)	0.3% (+0.1%)	13.8% (+3.0%)	47.2% (+0.5%)	34.8% (▲4.0%)	0.6% (▲0.2%)	17.1% (+3.5%)
	マレーシア	65.5% (+17.0%)	32.2% (▲18.4%)	0.3% (+0.2%)	1.3% (+1.1%)	66.4% (▲2.5%)	28.2% (+0.5%)	0.9% (+0.3%)	3.3% (+1.7%)
	インドネシア	62.8% (▲11.5%)	35.5% (+10.8%)	0.1% (+0.0%)	1.2% (+0.6%)	73.3% (+1.3%)	23.2% (▲0.1%)	0.7% (▲0.2%)	2.0% (▲0.3%)
	シンガポール	40.0% (▲16.0%)	56.5% (+17.3%)	0.2% (▲0.1%)	3.2% (▲1.1%)	61.8% (▲4.2%)	30.5% (+5.2%)	1.0% (▲0.0%)	6.2% (▲0.9%)
	フィリピン	40.8% (▲2.9%)	58.4% (+3.0%)	0.5% (+0.2%)	0.4% (▲0.3%)	45.3% (▲1.5%)	53.6% (+1.6%)	0.5% (+0.2%)	0.6% (▲0.1%)
	ベトナム	66.6% (▲13.6%)	33.1% (+13.6%)	0.2% (▲0.1%)	0.0% (▲0.0%)	76.2% (▲3.5%)	22.8% (+3.8%)	0.7% (▲0.3%)	0.1% (+0.0%)
	インド	78.5% (▲5.2%)	18.8% (+4.4%)	1.3% (+0.1%)	0.9% (+0.5%)	72.5% (+0.7%)	18.8% (+0.7%)	5.6% (▲1.3%)	1.8% (+0.5%)
	オセア ニア	オーストラリア	53.7% (▲0.9%)	44.4% (+0.8%)	0.0% (+0.0%)	1.8% (+0.1%)	58.0% (▲3.6%)	22.3% (+3.7%)	0.5% (+0.2%)
ニュージーランド		26.8% (▲9.3%)	59.4% (+3.9%)	0.3% (▲0.2%)	11.8% (+4.5%)	28.4% (▲5.4%)	45.8% (▲4.0%)	0.7% (▲0.2%)	23.0% (+8.8%)
欧州	英国	32.1% (+3.8%)	40.1% (+6.1%)	7.1% (▲1.5%)	20.4% (▲7.6%)	21.7% (+1.3%)	29.5% (+2.2%)	8.6% (▲0.2%)	39.2% (▲3.3%)
	スイス	6.7% (▲2.3%)	61.4% (+15.7%)	3.4% (+0.3%)	27.5% (▲14.1%)	11.0% (+0.9%)	44.6% (+4.5%)	10.5% (+0.7%)	31.3% (▲7.1%)
	ドイツ	9.5% (+3.3%)	53.8% (+1.2%)	33.1% (▲5.9%)	*	9.5% (+1.2%)	36.1% (+2.0%)	53.1% (▲3.1%)	*
	イタリア	6.4% (▲1.6%)	63.5% (+21.0%)	27.6% (▲19.9%)	*	4.8% (▲0.2%)	44.5% (+10.2%)	49.7% (▲9.9%)	*
	フランス	15.0% (+4.1%)	53.1% (+2.5%)	27.9% (▲9.3%)	*	10.3% (▲0.5%)	41.6% (+2.1%)	46.6% (▲1.5%)	*
	スペイン	7.7% (▲12.4%)	58.6% (+7.3%)	31.3% (+3.2%)	*	7.9% (+0.8%)	37.9% (+3.2%)	52.9% (▲4.0%)	*
	アイルランド	18.1% (+5.5%)	77.4% (▲1.3%)	4.4% (▲4.0%)	*	28.8% (+9.8%)	58.6% (▲7.1%)	12.0% (▲2.6%)	*
	ベルギー	9.7% (▲9.1%)	49.6% (▲5.6%)	17.5% (▲7.1%)	*	14.0% (▲0.2%)	31.3% (+4.2%)	53.7% (▲3.3%)	*
	オランダ	11.4% (+3.2%)	37.9% (▲27.4%)	43.8% (+18.3%)	*	12.3% (+1.8%)	28.7% (▲12.2%)	58.0% (+10.8%)	*
	スウェーデン	7.0% (▲1.2%)	74.8% (+9.3%)	13.2% (▲4.5%)	4.2% ▲3.9%	10.9% (+0.3%)	54.9% (+1.7%)	22.5% (+2.5%)	11.1% ▲4.1%
	ロシア	74.3% (▲4.9%)	24.3% (+4.0%)	0.9% (+0.6%)	0.4% (+0.4%)	61.0% (+1.8%)	24.8% (▲6.7%)	12.2% (+4.7%)	1.1% (+0.4%)
北米 及び 中南米	米国	71.8% (▲3.7%)	27.4% (+4.2%)	0.4% (▲0.4%)	*	80.9% (▲2.4%)	17.8% (+2.2%)	0.8% (+0.2%)	*
	カナダ	51.3% (▲10.4%)	44.9% (+11.0%)	0.2% (▲0.1%)	3.3% (▲0.4%)	66.0% (▲0.8%)	22.8% (+3.0%)	0.9% (+0.3%)	9.4% (▲2.7%)
	メキシコ	57.9% (▲7.8%)	41.0% (+8.1%)	0.4% (▲0.3%)	0.1% (▲0.0%)	66.4% (▲4.3%)	31.2% (+4.4%)	1.2% (+0.2%)	0.3% (+0.2%)
	ブラジル	76.3% (+3.5%)	23.5% (▲3.1%)	0.1% (▲0.3%)	0.0% (+0.0%)	80.5% (▲8.2%)	16.7% (+8.5%)	1.8% (▲0.1%)	0.6% (+0.2%)
	チリ	29.3% (▲5.2%)	70.4% (+5.1%)	0.1% -	0.0% -	68.7% (▲8.2%)	29.0% (+7.7%)	1.2% (▲0.1%)	0.0% -
その他	アラブ首長国連邦	96.7% (+14.8%)	3.3% (▲14.8%)	0.0% -	0.0% -	86.7% (+4.0%)	9.0% (▲4.5%)	1.9% (+0.8%)	1.6% (▲0.1%)
	サウジアラビア	97.0% (▲1.3%)	3.0% (+1.3%)	0.0% -	0.0% -	80.9% (▲0.0%)	18.5% (+0.9%)	0.3% (+0.0%)	0.3% (▲0.8%)
	クウェート	96.2% (▲3.4%)	3.8% (+3.4%)	0.0% -	0.0% -	87.5% (▲0.7%)	10.1% (▲0.3%)	0.0% -	2.2% (+1.1%)
	カタール	98.2% (+0.7%)	1.8% (▲0.7%)	0.0% (+0.0%)	0.0% (▲0.0%)	93.1% (▲1.4%)	5.6% (+1.1%)	1.1% (+0.9%)	0.1% (▲0.4%)
	南アフリカ共和国	77.1% (+5.2%)	21.7% (+0.7%)	0.8% (▲5.9%)	0.2% (+0.1%)	56.0% (▲1.5%)	30.1% (+1.1%)	8.8% (▲1.1%)	2.6% (+0.3%)

(注) () 内の数値は2020年と2014年のインボイス通貨シェアの比較(差)を表す。*印は相手国通貨建てがドル建て、あるいはユーロ建ての欄に記入されている。-印は実績がないか、数値が僅少等の理由で、割合としての記載が困難なものである。

V. 各国別データの詳細

次に各国別のデータについて2014年から2020年までの半期ベースでの貿易建値通貨建てシェアの推移をそれぞれ見てみよう。貿易建値通貨シェアについては、円建て、ドル建てと貿易相手国の通貨建て（グラフ中では相手国通貨建てと表現している）の3つについてのシェアの推移を表している。必要に応じて、ユーロ建てを加えている場合もある。

V-1 輸出

V-1-1 アジア向け輸出

下記の図はアジア各国・各地域向けの輸出におけるインボイス通貨シェアの推移を表している。中国向け輸出については、ドル建てシェア（金額ベース）が2014年前期の59.6%から徐々に低下し、2020年後期には5割以下に低下している（図4-1）。その代わりに人民元建てシェアが同期間に3.7%から10.8%まで上昇している。円建てシェアも同期間に36.5%から41.2%に小幅ながらも上昇している。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建てシェアにおいて件数ベースが金額ベースを上回り、ドル建てシェアにおいてその逆となっている。これは円建て取引が比較的少額取引に使われていることを示唆する。人民元建てについても、2020年後期に件数ベースのシェアが14.2%と金額ベースの10.8%を上回っており、少額取引においてより人民元が使われていることを示唆している。

香港向け輸出については、ドル建てシェア（金額ベース）が2014年前期の56.5%から徐々に低下し、2020年後期には47.0%に低下している（図4-2）。その代わりに円建てシェアが同期間に41.1%から50.5%まで上昇し、円が最も使われている通貨となっている。香港ドルは金額ベース、件数ベースともに1～2%台と低く、その状況に変化はない。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建て取引において件数ベースシェアは2020年後期には6割以上となり金額ベースの50.5%を大きく上回っており、中国と同様に円建て取引が比較的少額取引に使われていることを示唆している。

図4-1 中国向け輸出インボイス通貨シェアの推移

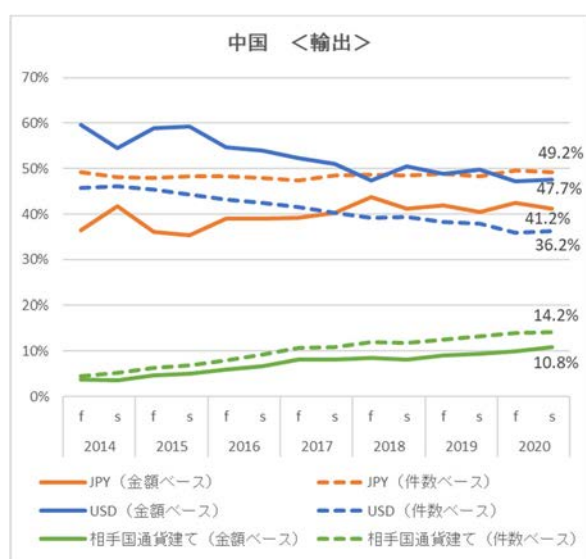
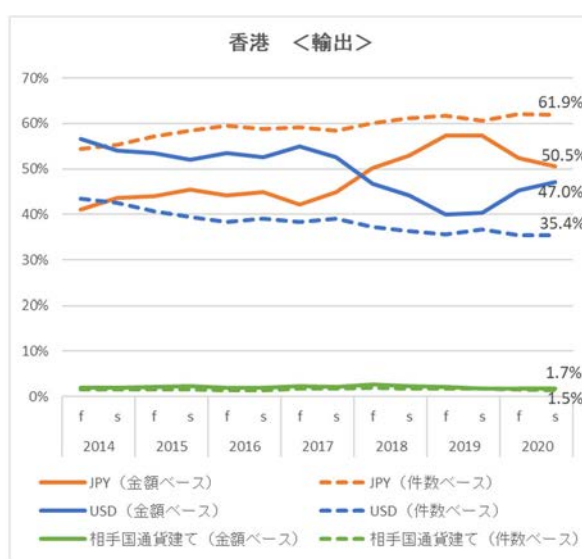


図4-2 香港向け輸出インボイス通貨シェアの推移



韓国向け輸出については、ドル建てシェア（金額ベース）が2014年前期の45.9%から徐々に低下し、2020年後期には34.9%に低下している（図4-3）。その代わりに円建てシェアが50.4%から58.7%に上昇

している。ウォン建てシェアも同期間に3.3%から6.1%に上昇している。金額ベースと件数ベースについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、ドル建て取引においてその逆となっている。件数ベースでは、円建てが7割前後で推移しており、比較的少額な取引で円建てが使われていることを示唆している。

台湾向け輸出については、金額ベースで円建てシェアがドル建てシェアを若干上回って推移している（図4-4）。2020年後期にドル建てシェア（金額ベース）は43.6%、円建てシェアは52.7%となっている。台湾ドルは金額ベースで3%台、件数ベースで5%であり、さほど変化はない。他のアジア諸国と同様に、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、ドル建て取引ではその逆となっている。これは金額のまとまった取引でドル建てが使われていることを示唆している。

図4-3 韓国向け輸出インボイス通貨
シェアの推移

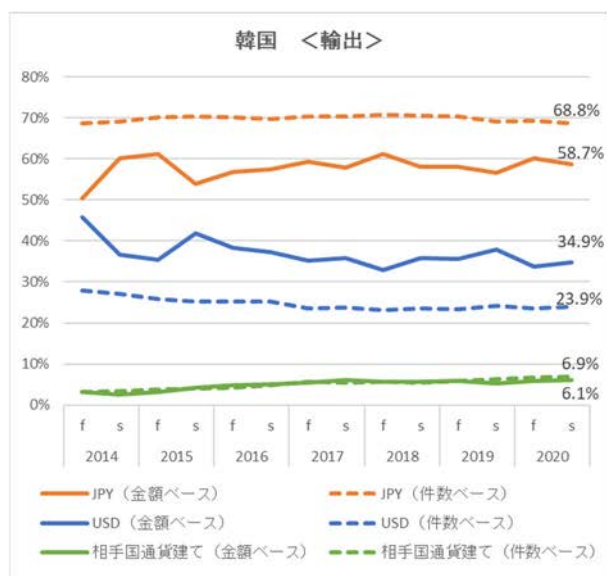
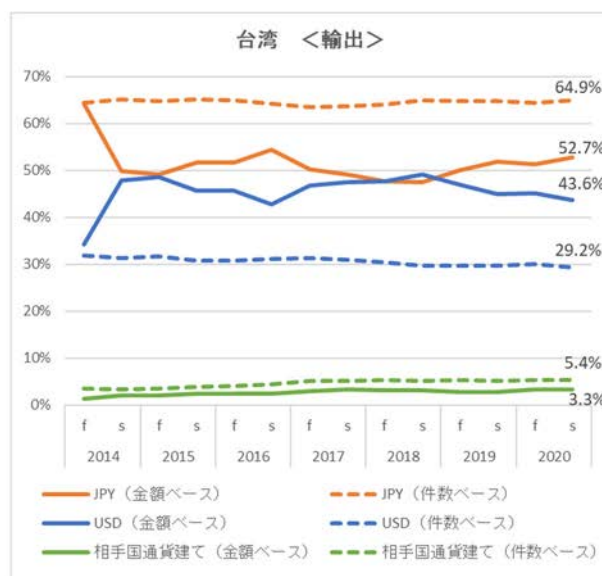


図4-4 台湾向け輸出インボイス通貨
シェアの推移



タイ向け輸出については、アジア向け輸出の中で一番相手国通貨建てが使われている（図4-5）。タイパーツ建てシェア（金額ベース）は2014年前期の10.0%から徐々に上昇し、2019年後期には16.8%となったが、2020年後期にはそこから若干減少して15.8%となっている。タイパーツ建ての上昇分、ドル建てシェアと円建てシェアはともに45%弱から42%前後まで若干低下している。金額ベースと件数ベースについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、ドル建て取引においてその逆となっている。件数ベースでは、円建てが5割強で推移しており、比較的少額な取引で円建てが使われていることを示唆している。

マレーシア向け輸出については、金額ベースではドル建てシェアと円建てシェアが拮抗しているが、2020年後期には円建てシェア（金額ベース）が53.2%とドル建てシェアの44.4%を上回った（図4-6）。リングgit建てシェアは金額ベースでは2%前後で推移しており、件数ベースでは2020年後期に4%台と若干上昇傾向にある。金額ベースと件数ベースの違いについては、他のアジア諸国と同様に円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回っている。件数ベースでは円建てが6割台で推移しており、比較的少額な取引は円建て、まとまった取引はドル建てが使われていることを示唆している。

図4-5 タイ向け輸出インボイス通貨シェアの推移

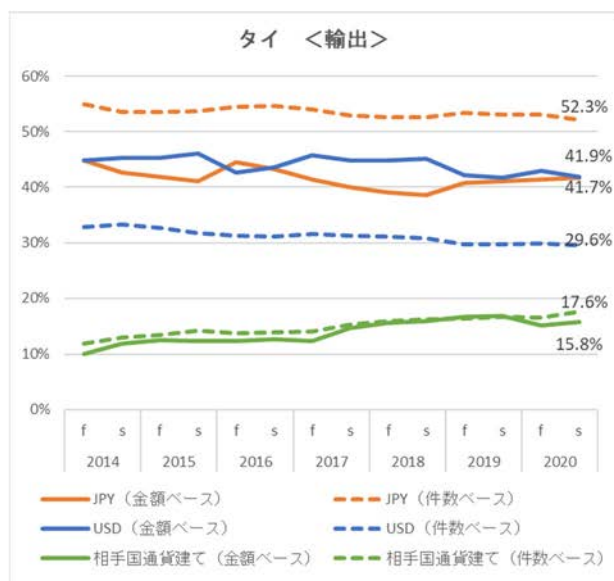
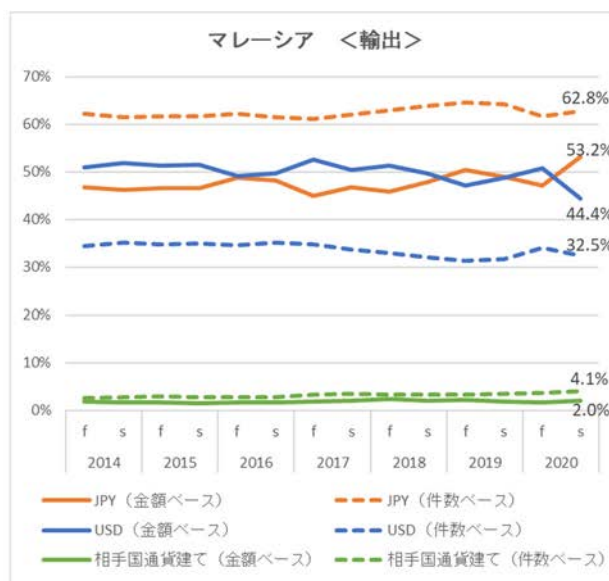


図4-6 マレーシア向け輸出インボイス通貨シェアの推移



インドネシア向け輸出については、ドル建てシェア（金額ベース）が2014年前期の57.7%から徐々に低下し、2020年後期には53.7%となっている（図4-7）。その代わりに円建てシェアが同期間に38.0%から40.2%まで若干上昇している。ルピア建てシェアも4.2%から2020年前期には7.1%まで上昇するも、2020年後期には5.9%と微減している。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、ドル建て取引においてその逆となっているが、その差は他のアジア諸国と比較するとさほど大きくない。

シンガポール向け輸出については、ドル建てシェア（金額ベース）が2014年前期の65.9%から徐々に低下し、2020年後期には56.3%に低下している（図4-8）。その代わりに円建てシェアが同期間に30.9%から39.7%まで上昇している。件数ベース見ると、円建てシェアは同期間に53.7%から56.2%に上昇している。シンガポールドル建てシェア（金額ベース）も同期間に2.9%から2018年後期には4%台に上昇したが、2020年後期には3.2%となっており、さほど上昇傾向にはない。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回って推移しており、件数ベースでのドル建て取引シェアよりも高く、その状況に変化はない。

図4-7 インドネシア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

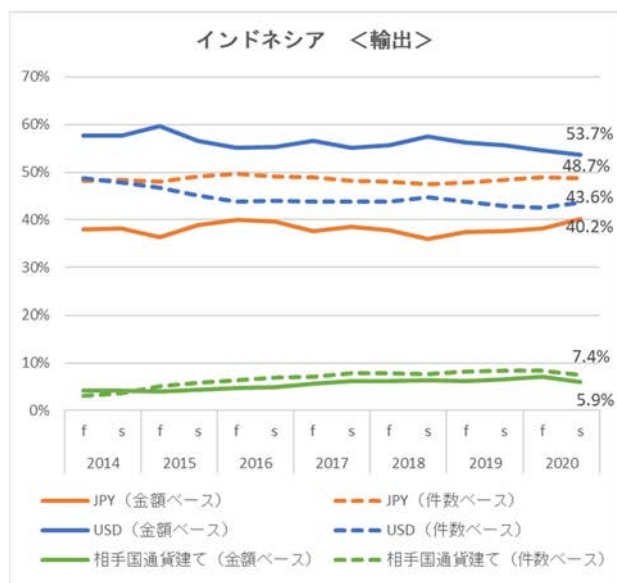
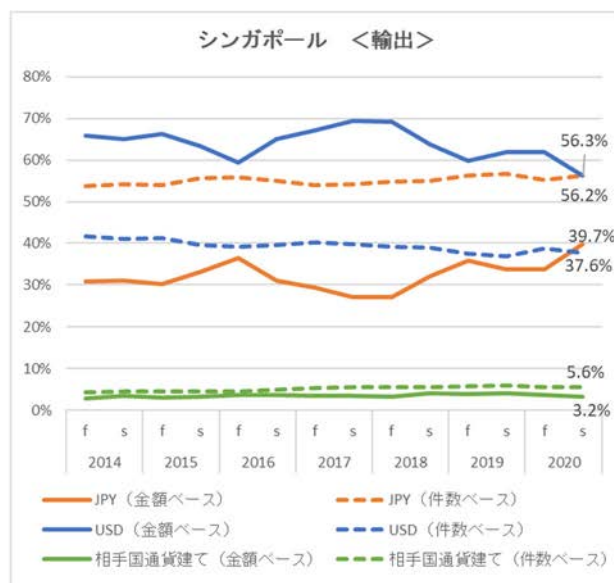


図4-8 シンガポール向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



フィリピン向け輸出については、2014年から2020年までの間に貿易建値通貨のシェアの変化は見られない(図4-9)。ドル建てシェア(金額ベース)は55%前後、円建てシェアは40%台前半で推移している。フィリピンペソ建ても1%未満であり、ほとんど利用されていない。件数ベースについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、ドル建て取引においてその逆となっている。件数ベースでは、円建てが6割弱で推移しており、比較的少額な取引で円建てが使われていることを示唆している。

ベトナム向け輸出については、他のアジア諸国とは異なり、ドル建てシェアが上昇傾向にある(図4-10)。ドル建てシェア(金額ベース)は2014年前期の60.5%から徐々に上昇し、2020年後期には66.1%に上がっている。その代わりに円建てシェアが同期間に39.0%から33.5%まで低下している。この期間に日本のサプライチェーンの拠点としてのベトナムの地位は高まっており、輸出金額も倍増していることから、より高額な輸出品をドル建てで行っていることが示唆される。ドン建てシェアについては、1%未満であり、ほとんど使われていない。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、件数ベースでのドル建てシェアよりも高く、比較的少額な取引で円建てが使われていることを示唆している。

図4-9 フィリピン向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

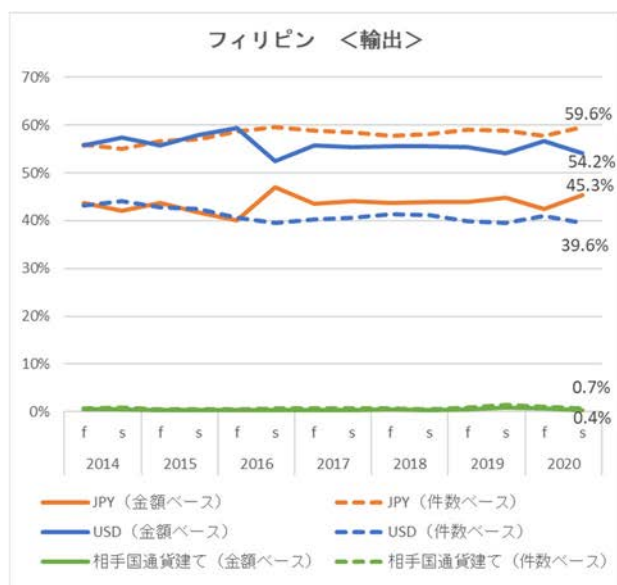
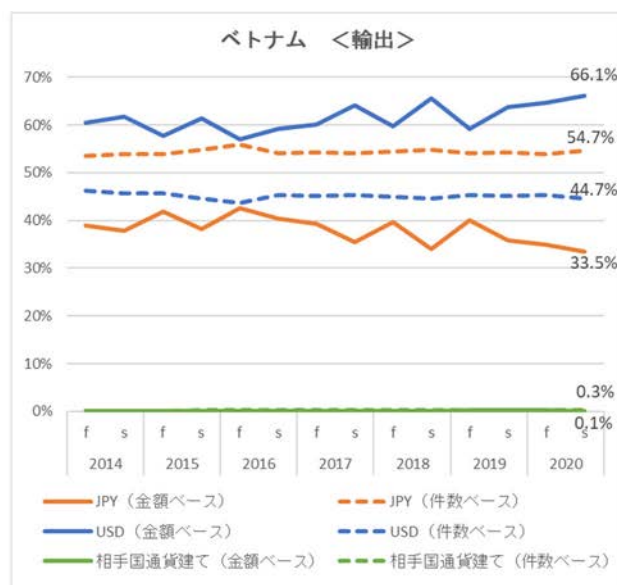
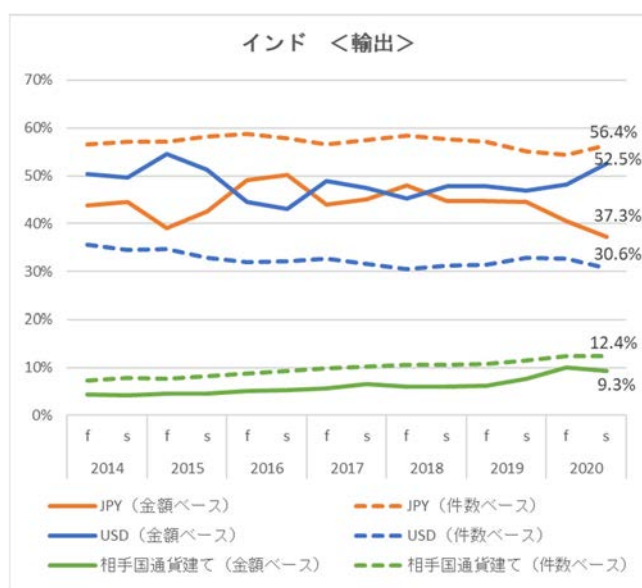


図4-10 ベトナム向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



インド向け輸出については、金額ベースでドル建てシェアと円建てシェアが2019年までほぼ拮抗していた（図4-11）。ドル建てシェア（金額ベース）は2020年後期に52.5%へと上昇したが、円建てシェアは37.3%と低下している。その代わりに、ルピー建てシェアが金額ベースで上昇傾向にあり、2014年前期には4.3%だったが、2020年後期には9.3%になった。ルピー建ては件数ベースでは2020年には12%台となっている。金額ベースと件数ベースの違いについては、円建て取引において件数ベースシェアが金額ベースを上回り、円建てが6割弱で推移している。これは比較的少額な取引で円建てが使われていることを示唆している。

図4-11 インド向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



V-1-2 オセアニア向け輸出

オーストラリア向け輸出については、豪ドル建てシェアが最も高く、2019年まで金額ベースで5割前後を推移していた（図4-12）。2020年になって豪ドル建てシェアは上昇し、2020年後期には67.9%となっている。その代わりにドル建てシェアが急落しており、最も高かった2019年後期の35.7%から2020年後期には9.3%まで低下している。円建てシェアは2割前後で推移している。件数ベースでは円建てシェアが最も高く、5割前後で推移しており、反対に豪ドル建てシェアは3割前後、ドル建てシェアは2割弱となっている。少額な取引は円建てで行われている傾向があることを示唆している。

ニュージーランド向け輸出については、金額ベースではドル建てシェアと円建てシェアが低下傾向にあり、それに代わってニュージーランドドル建てシェアが上昇している（図4-13）。円建てシェアは2014年前期には51.2%だったが、2020年後期には45.0%まで低下した。同様に、ドル建てシェアも18.6%から11.7%まで低下した。一方、ニュージーランドドル建てシェアは同期間に22.8%から39.9%まで上昇した。ニュージーランドドル建てシェアは件数ベースでも3.9%から22.2%まで上昇している。件数ベースで見ると、円建てシェアは2014年前期の86.5%から2020年後期の71.1%へと低下しているが、他と比べてはるかにシェアが高い。これは少額取引において円建てが多く使われていることを示唆している。

図4-12 オーストラリア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

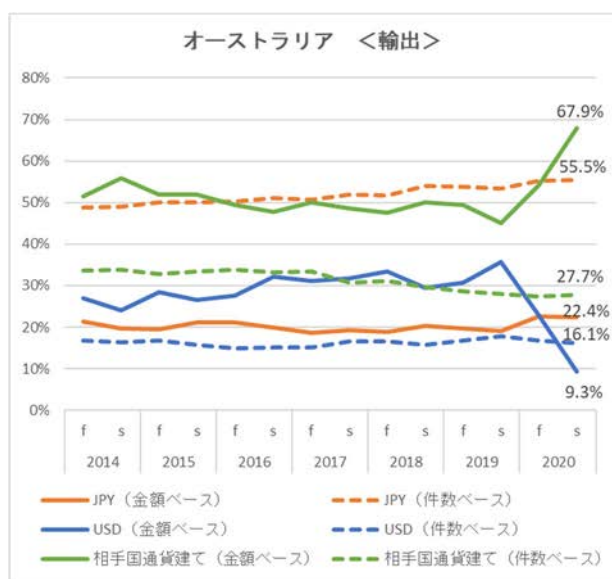
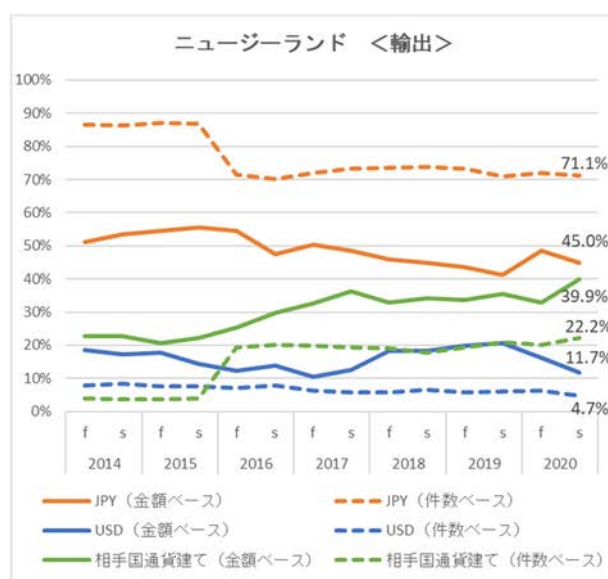


図4-13 ニュージーランド向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



V-1-3 欧州向け輸出

英国向け輸出については、金額ベースではポンド建てシェアが最も高く、次いでドル建てシェア、円建てシェアという順番になっている（図4-14）。ただし、この傾向は時期によってさまざまであり、変化が激しい。ポンド建てシェアは2020年前期には42.3%と最も高かったが、2020年後期には29.8%と低下した。ドル建てシェアも2016年後期には38.7%と高かったが2020年後期には28.5%に低下した。このことは、その時期の輸出財によって貿易建値通貨の選択が異なり、ドル建てもしくはポンド建てのいずれかが多く使用されたためと考えられる。なお、円建てシェアは概ね20%前後で推移しており、その傾向に変化はない。件数ベースでは円建てシェアが最も高く、4割前後となっている。

スイス向け輸出においても、英国向けと同様に貿易建値通貨シェアの変化が激しい（図4-15）。2014

年から2020年までの期間の大部分において、金額ベースではドル建てシェアが最も高く、2017年後期には6割以上を占めていたが、2020年後期には54.7%であった。スイスフラン建てでも変化が激しく、2015年前期には51.6%だったが、2020年後期には20.7%まで低下している。円建てシェアも2018年後期には42.1%と最も高かったが、2020年後期は20.8%となっている。件数ベースでは、円建てシェアが最も高く、全期間を通じて6割前後で推移している。このことは少額の輸出は円建てで、まとまった金額の輸出はドル建て、あるいはスイスフラン建てで行われていることを示唆するものである。

図4-14 英国向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

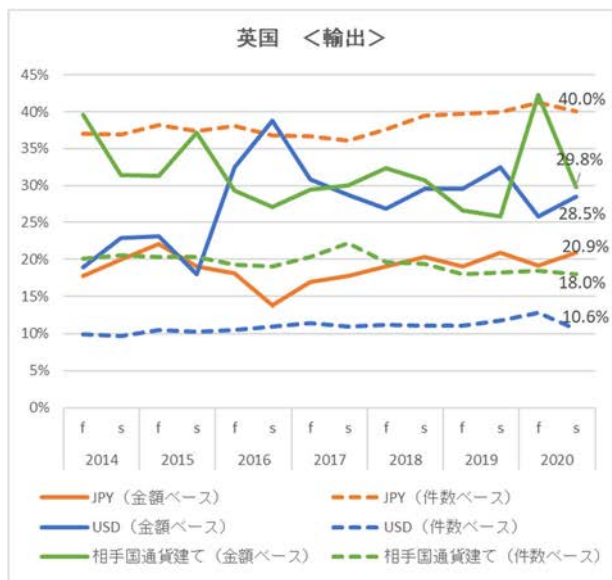
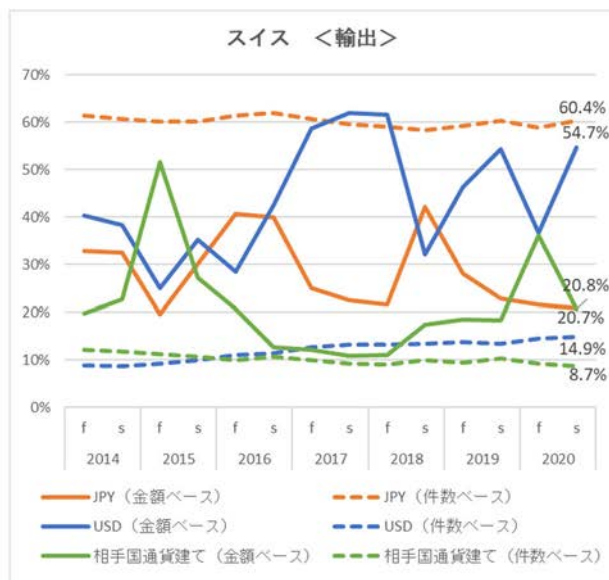


図4-15 スイス向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



ドイツ向けの輸出においては、金額ベースではユーロ建てシェアが最も高く、そのシェアは緩やかな増加傾向にある（図4-16）。2014年から2017年までは5割前後であったユーロ建てシェアは、2020年後期には54.8%に上昇している。その代わりに、円建てシェアとドル建てシェアは同期間にわずかながら低下している。件数ベースにおいても最も大きいのはユーロ建てシェアであり、40%台後半を推移している。全期間を通じて、あまり大きな変化は見られないのがドイツ向け輸出の特徴となっている。ドイツ向け輸出では、金額ベースで見ても、ドル建てシェアが他の国や地域に比べて低い。これは、ユーロが国際通貨であるため、輸出者と輸入者にとっては事実上、円とユーロの二通貨から選択する状況だと推測される。ドル建てシェアについて、金額ベースと件数ベースの差は他の国や地域に比べて大きくない。一方、円建てシェアは件数ベースが金額ベースよりも高く、ユーロ建てシェアは件数ベースが金額ベースよりも低い傾向が見られる。後述するように、このドイツ向け輸出のインボイス通貨選択のパターンは他のユーロ加盟国向け輸出でも同様に観察される。事実上、円とユーロの二通貨が選択され、かつ、小規模取引では輸出国通貨である円が採用される傾向があると言える。

オランダ向け輸出においても、ドイツ向けと同様に金額ベースと件数ベースどちらもユーロ建てシェアが最も高く、6割前後で推移している（図4-17）。金額ベースでのユーロ建てシェアは緩やかな上昇傾向にあり、2014年前期の61.3%から2020年後期には66.0%まで上昇している。円建てシェアは3割以下、ドル建ては1割前後の水準を推移しており、これらの傾向に目立った変化はない。ドイツ向けと同様に、金額ベースと件数ベースの差もあまりない。

図4-16 ドイツ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

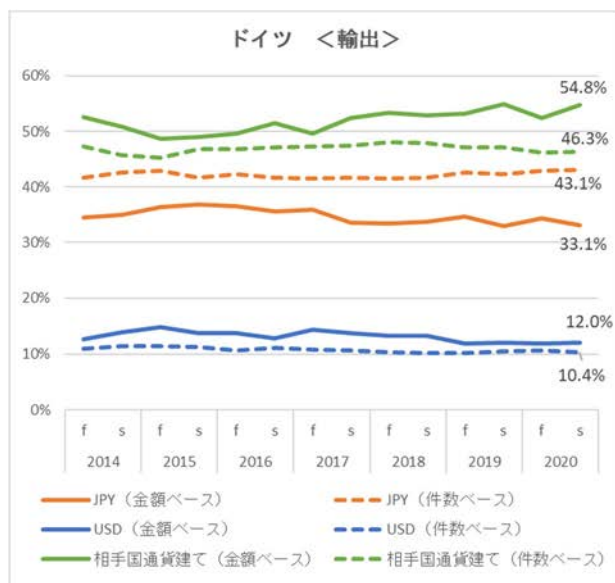
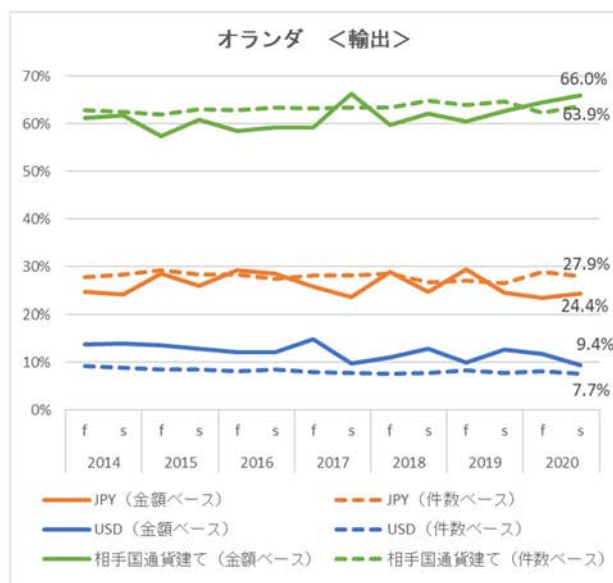


図4-17 オランダ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



フランス向け輸出においても、金額ベース・件数ベースともにユーロ建てシェアが最も高いが、変動が激しい(図4-18)。金額ベースで見ると、ユーロ建てシェアは2014年後期には74.3%と高かったが、2020年前期に46.8%まで低下し、2020年後期には61.8%まで上昇している。円建てシェアも変動が大きいが、緩やかな上昇傾向にある。2014年前期の22.2%から2020年前期の45.7%まで上昇したが、2020年後期には30.8%へとシェアを下げている。ドル建てシェアは概ね10%未満で推移している。件数ベースでは、ユーロ建てシェアが最も高く5割前後で推移しており、円建てシェアがそれに次いで4割前後となっている。

イタリア向け輸出においても金額ベースではユーロ建てシェアが最も高く、5割前後から6割前後の間で推移している(図4-19)。円建てシェアは2番目だが、そのシェアは若干低下傾向にある。2014年前期に円建てシェアは44.4%であったが、2020年後期には29.0%と低下している。イタリア向け輸出ではドル建てシェアが微増傾向にあり、2014年前期の7.9%から2020年後期には11.4%まで上昇している。件数ベースでは、円建てシェアとユーロ建てシェアが拮抗しており、どちらも40%台半ばの水準を推移している。

図4-18 フランス向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

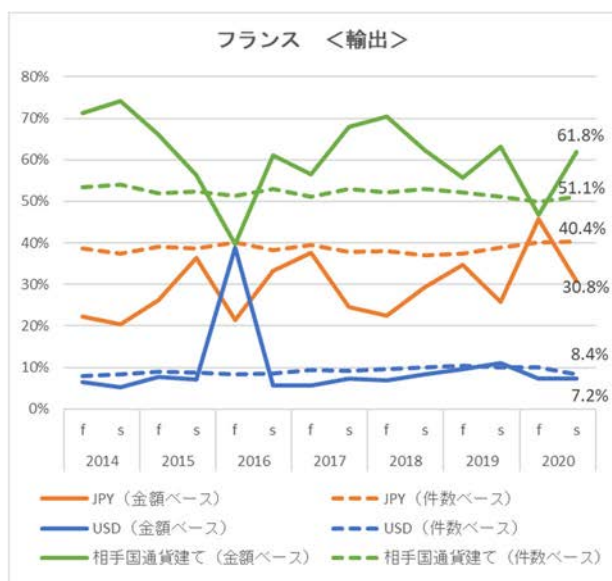
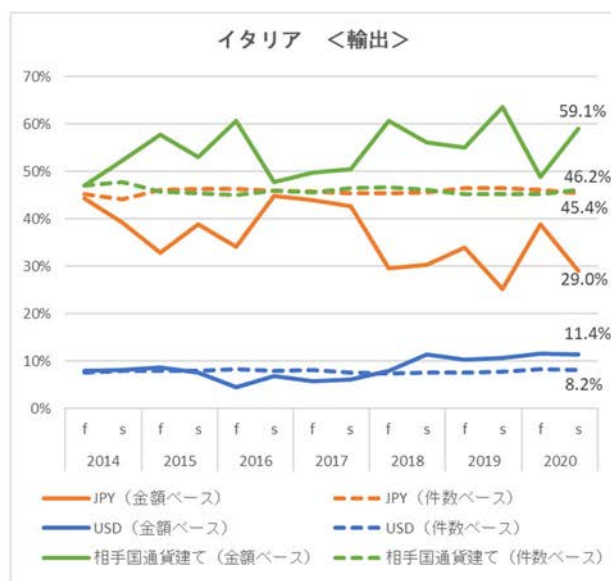


図4-19 イタリア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



スペイン向け輸出において、金額ベースではユーロ建てシェアが最も高く、2016年前期には79.9%に達したものの、その後徐々に低下しており、2020年後期には68.5%となっている（図4-20）。その代わりに円建てシェアとドル建てシェアが微増している。円建てシェアは2014年前期には20.7%であったが、2020年後期には22.1%となっている。ドル建てシェアは同期間に6.4%から9.3%と上昇している。スペイン向け輸出では、件数ベースと金額ベースのシェアの差が大きい。円建ては件数ベースのシェアが高く、ユーロ建ては件数ベースでシェアが低い傾向にある。このことは、少額の輸出は円建てで行い、高額の輸出はユーロ建てで行う傾向があることを示唆している。

ベルギー向けの輸出でも、金額ベース・件数ベースともにユーロ建てシェアが最も高く、どちらも6割前後で推移しているが、金額ベースのシェアは若干減少傾向にある（図4-21）。ユーロ建てシェアは金額ベースで2014年前期には61.3%だったが、2020年後期には53.9%まで低下した。その代わりに、円建てシェア（金額ベース）は2014年の28.1%から2020年後期には38.7%まで上昇している。ドル建てシェアは2014年前期の10.5%から2020年後期には7.4%と減少している。金額ベースと件数ベースのシェアの差はそれほど大きくない。

図4-20 スペイン向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

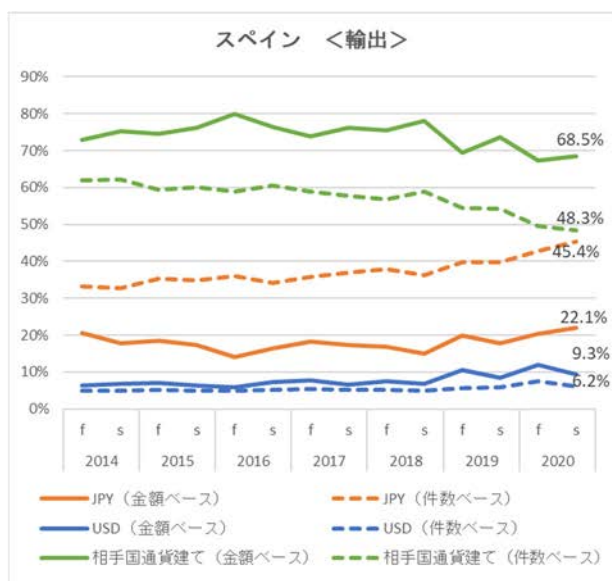
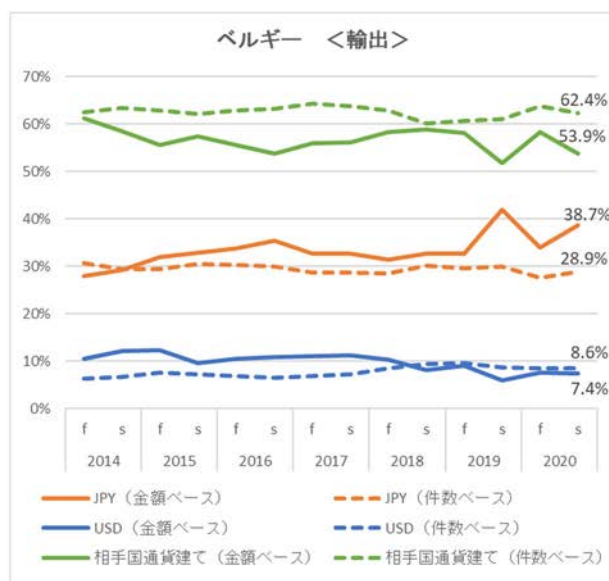


図4-21 ベルギー向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



ロシア向け輸出では、金額ベースでルーブル建てシェアが最も高く、次いで円建てシェア、ドル建てシェアという順番になっている（図4-22）。ルーブル建てシェア（金額ベース）は2016年後期に5割に達したが、その後は低下し、2020年後期の水準は36.3%である。ドル建てシェアも低下傾向にあり、2014年前期の25.4%から2020年後期には14.2%まで低下した。その代わりに円建てシェアが上昇し、同期間に23.2%から32.9%まで上昇した。件数ベースでは、円建てシェアが最も高く、2020年後期には61.9%となっている。反対に、ルーブル建てシェアは件数ベースが金額ベースを大きく下回っており、2016年後期に20%台半ばまで上昇した後、2020年後期には18.5%へと低下している。この金額ベースと件数ベースの差は、少額の輸出が円建てで行われ、まとまった金額の輸出がルーブル建てで取引されていることを示唆している。ロシアでは、ユーロ建ても使われており、2018年以降は概ね金額ベースで10%台半ば、件数ベースで10%未満を推移している。

ポーランド向け輸出では、金額ベース・件数ベースともにユーロ建てシェアが最も高く、概ね5割以上で推移している（図4-23）。円建てシェアは2番目に高かったが、近年低下傾向にある。2015年、2016年には金額ベースで3割前後だったシェアが、2020年前期には19.3%まで低下した。反対に、ドル建てシェア（金額ベース）は上昇傾向にあり、2014年前期の9.6%から2020年前期には30.9%まで上昇した。ポーランドズロチ建て（金額ベース）は、2017年前期には金額ベースで15.4%まで上昇したが、その後急低下し、2020年後期のシェアは1.2%となっている。2010年代以降のポーランド経済の成長を背景に工業化が進み、グローバル経済に取り込まれ、ドル建てが増えているものと思われる。

図4-22 ロシア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

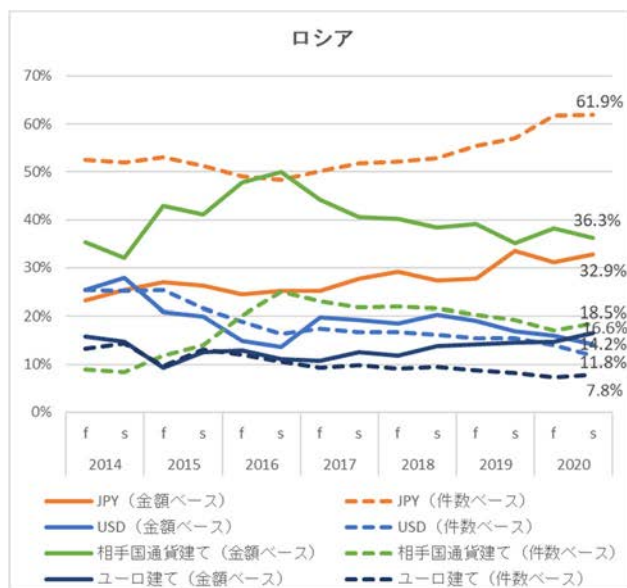
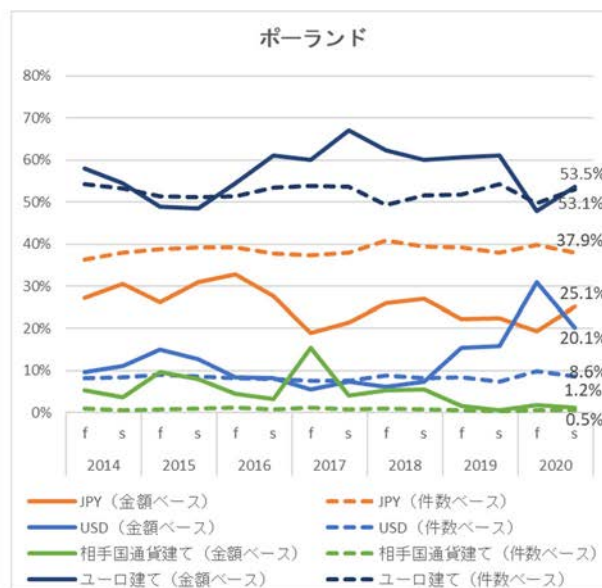


図4-23 ポーランド向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



ハンガリー向けの輸出においては、金額ベース・件数ベース共にユーロ建てシェアが最も高く、金額ベースでは8割近くを占めている（図4-24）。円建てシェアは金額ベースで上昇傾向にあり、2014年前期に14.1%だったシェアは2020年後期には17.9%まで上昇した。ドル建てシェアは低下傾向にあり、2014年前期に10.9%だったシェアは2020年後期には5.1%まで低下している。ハンガリーフォリントは貿易建値通貨としてはほとんど使われておらず、ユーロを自国通貨の代替として対外取引に使用していることが窺える。金額ベースと件数ベースのシェアの差はさほどない。

トルコ向け輸出においては、2016年前期までは金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが一番高かったが、その後ユーロ建てシェアが金額ベースで急上昇し、2020年後期には58.9%となっている（図4-25）。円建てシェアは低下傾向にあり、2014年前期に40.9%だったシェアは2020年後期には24.3%まで低下した。ドル建てシェアも同様に低下傾向にあり、2014年前期に25.1%だったシェアは2020年後期には14.9%まで低下した。トルコリラ建てシェアは2016年には金額ベースで5%前後であったが、その後低下し2020年後期には金額ベース・件数ベースともに2%以下となっている。件数ベースでは、円建てシェアが最も高いが、50%台だった2016年以降は徐々に低下し、2020年後期には44.1%となっている。

図4-24 ハンガリー向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

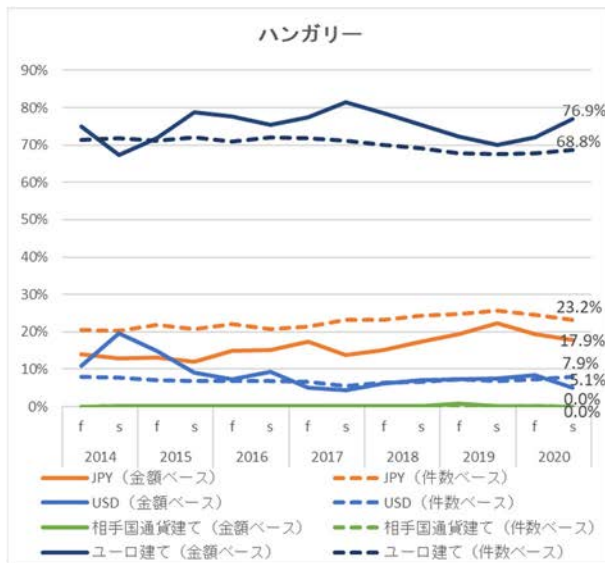
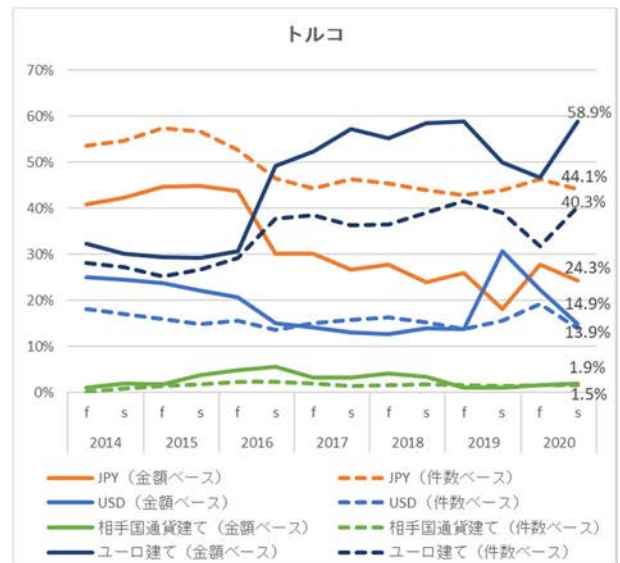


図4-25 トルコ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



V-1-4 北米、および中南米向け輸出

米国向け輸出においては、金額ベース・件数ベースともドル建てシェアが円建てシェアを大きく凌駕している（図4-26）。金額ベースでのドル建てシェアは、2020年後期には87.9%と9割に迫っている。円建てシェアは2020年後期で12.0%であり、全期間を通じて大きな変化は見られない。件数ベースでは、円建てシェアが金額ベースよりおよそ10%ポイント高くなっているが、その差はその他の国と比較するときほど大きくないと言える。この背景の一つとして、小規模取引を行う中小規模の企業でも、流動性の高いドルであれば比較的為替リスク管理が容易であるため、外貨建て（ドル建て）の決済を受け入れやすいということがあるかも知れない。

カナダ向け輸出においては、金額ベースではドル建てシェアとカナダドル建てシェアが拮抗しているが、ドル建てシェアが若干低下傾向にあるのに対して、カナダドル建てシェアは緩やかな上昇傾向にある（図4-27）。ドル建てシェアは金額ベースで2014年前期には51.5%であったが、2020年後期には42.6%まで低下した。同時期に、カナダドル建てシェアは37.1%から47.9%まで上昇し、5割近くに達している。円建てシェアは10%前後で推移しており、目立った変化はない。件数ベースでは、ドル建てシェアが最も高く、次いで円建てシェアがカナダドル建てシェアを抜き二番目になっている。このことは、比較的少額の取引は円建てで行い、まとまった金額の取引ではカナダドルが使われる傾向があることを示唆している。

図4-26 米国向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

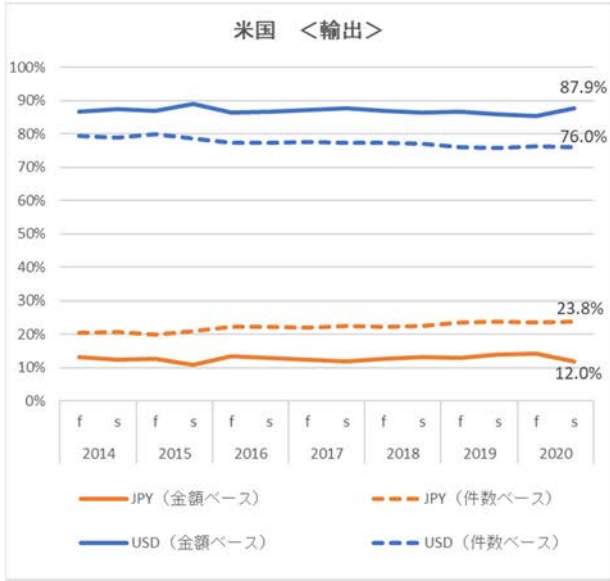
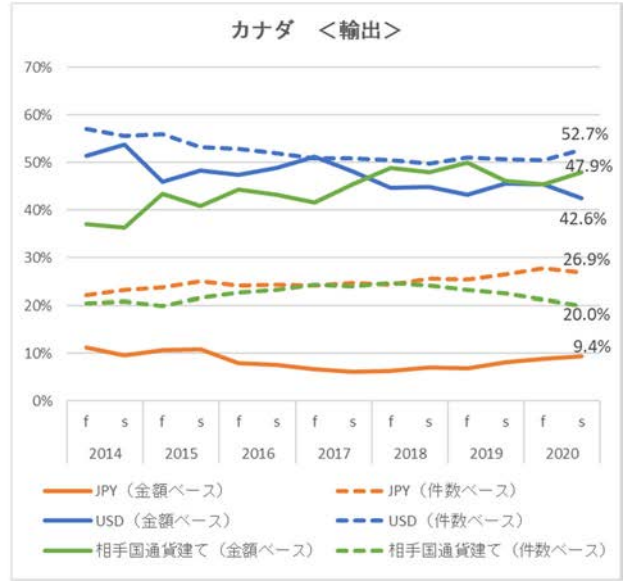


図4-27 カナダ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



メキシコ向けの輸出においては、金額ベース・件数ベースのどちらにおいてもドル建てシェアが最も高いが、そのシェアは低下傾向にある（図4-28）。金額ベースのドル建てシェアは2014年前期には73.2%だったが、2020年後期には63.7%に低下している。円建てシェアは全期間を通じてほぼ20%台であり、さほど変化していない。これに対して、メキシコペソ建ては上昇傾向にある。金額ベースのメキシコペソ建てシェアは2014年前期に2.7%だったが、2020年後期には13.5%まで上昇している。メキシコ向けの輸出においては、金額ベースと件数ベースのシェアの差はほとんどない。

パナマ向け輸出においては、金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが最も高く、近年上昇傾向にある（図4-29）。金額ベースの円建てシェアは、2016年前期には53.0%まで落ち込んだが、その後は上昇に転じ、2020年後期には71.3%となっている。反対にドル建てシェアは2016年前期には47.0%まで上昇するも、その後は低下傾向にあり、2020年後期には28.6%となった。パナマはドル化政策を採用しているので、相手国通貨建ての貿易取引はない。

図4-28 メキシコ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

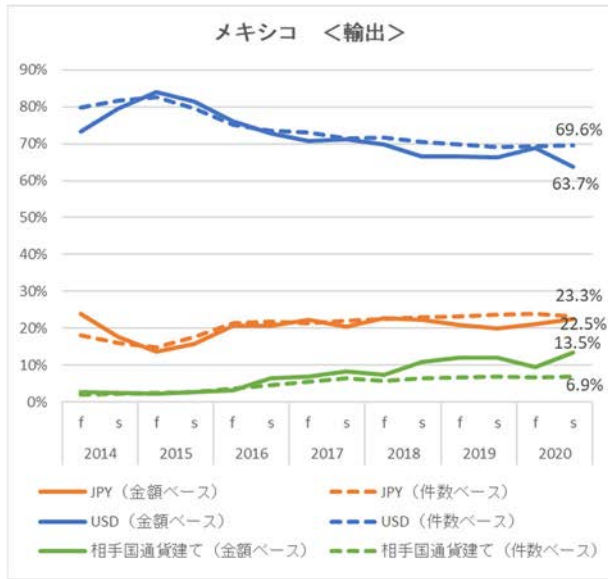
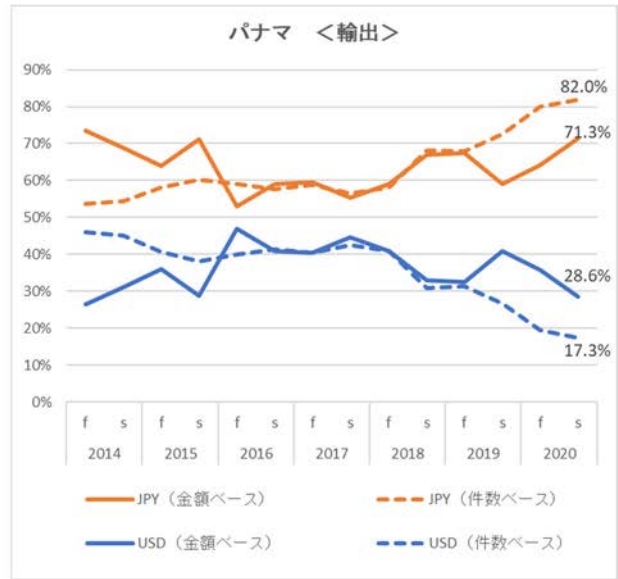
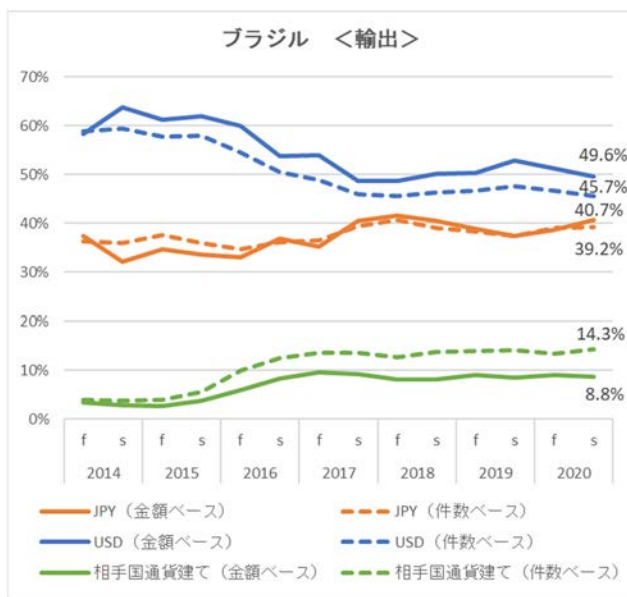


図4-29 パナマ向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



ブラジル向けの輸出においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高いが、そのシェアは低下傾向にある(図4-30)。ドル建てシェアは2014年後期には63.9%であったが、その後徐々に低下し2020年後期には49.6%と5割以下になっている。それに代わって、円建てシェアとブラジルレアル建てシェアが上昇傾向にある。円建てシェアは2014年には3割台であったが、2020年後期には40.7%まで上昇している。ブラジルレアル建てシェアも2014年後期から2020年後期までの期間に3.0%から8.8%まで上昇している。ブラジル向け輸出においては、件数ベースと金額ベースのシェアの差はほとんどない。

図4-30 ブラジル向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



V-1-5 その他地域向け輸出

アラブ首長国連邦向けの輸出においては、金額ベース・件数ベースとも円建てシェアが最も高い(図4-31)。円建てシェアは2017年までは7割台であったが、その後減少傾向にあり、2020年後期には61.6%となっている。ドル建てシェアは金額ベースでは3割前後で推移しているが、近年は若干上昇傾向にあり、2020年後期には33.5%となっている。アラブ首長国連邦向けの輸出では、相手国通貨はほとんど使われておらず、2020年後期の金額ベースのシェアは1.4%と低い。アラブ首長国連邦向けの輸出において、金額ベースと件数ベースのシェアの差はさほどなかったが、近年は若干拡大傾向にあり、件数ベースの円建てシェアが金額ベースのシェアを10%ポイントほど上回っている。

サウジアラビア向け輸出においては、金額ベースでは円建てシェアが最も高く、件数ベースではドル建てシェアが最も高いという特徴がある(図4-32)。2020年後期の円建てシェアは金額ベースでは65.7%、件数ベースでは33.3%となっているのに対して、ドル建てシェアは金額ベースでは同時期に32.6%、件数ベースでは64.3%となっている。このことは、金額が大きい財の輸出において円建てが主に用いられていることを示唆するものである。サウジアラビア建てのシェアは金額ベース・件数ベースともに1%未満であり、ほとんど使われていない。

図4-31 アラブ首長国連邦向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

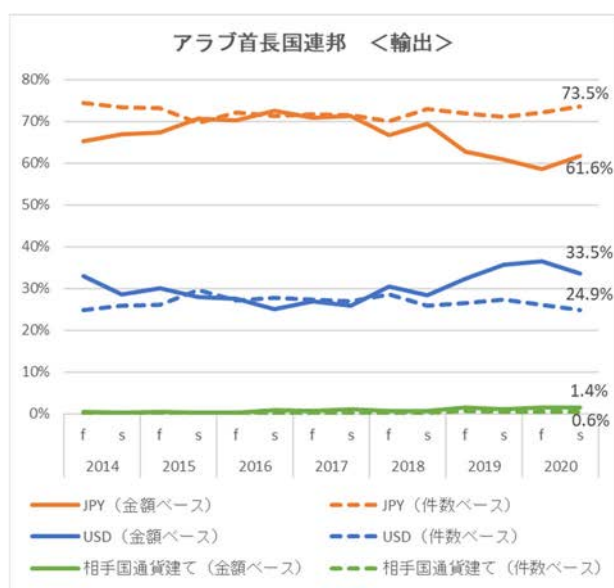
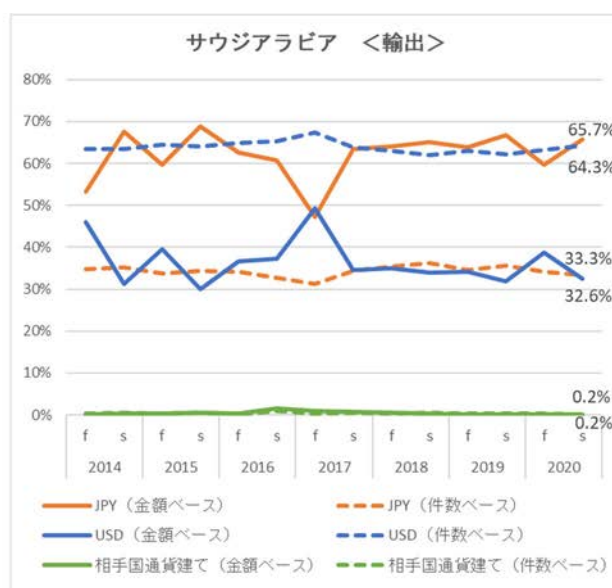


図4-32 サウジアラビア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



南アフリカ共和国向けの輸出においては、金額ベースでは円建てシェアとユーロ建てシェアが4割前後で拮抗しているが、円建てシェアは若干上昇傾向にある(図4-33)。円建てシェアは、2014年前期には31.2%だったが、2020年後期には38.0%まで上昇している。ドル建てシェアとランド建てシェアはともに10%前後を推移している。ランド建てシェアは金額ベースでは若干低下傾向にあり、2014年前期15.4%だったが、2020年以降は10%台を割り込んでいる。件数ベースでは、円建てシェアが最も高く、5割弱となっているが、ユーロ建ては2割台で推移している。このことは、比較的少額の輸出は円建てで行うのに対して、まとまった金額の輸出はユーロ建てで行われていることを示唆するものである。

リベリア向けの輸出においては、金額ベースで円建てとドル建てのシェアが大きく変動しており、近年は円建てシェアが上昇し、ドル建てシェアが低下している(図4-34)。2020年後期の円建てシェアは55.8%、ドル建てシェアは44.1%である。リベリア向けの輸出の特徴は、金額ベースと件数ベースの

シェアの差がサンプル国中最も大きいことである。件数ベースでの円建てシェアが概ね9割以上であるのに対して、ドル建てシェアは5%前後から、2019年後期以降は2%台を割っている。リベリア向けの主要な輸出品は船舶であることから、これらの取引がドル建てで行われていることを示唆するものである。

図4-33 南アフリカ共和国向け輸出
インボイス通貨シェアの推移

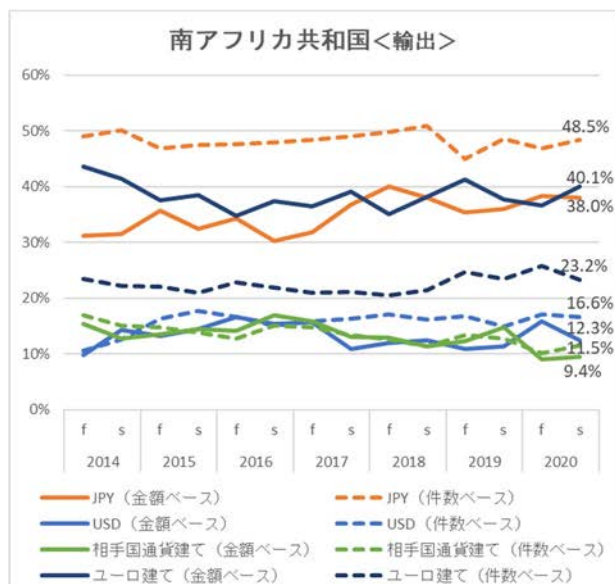
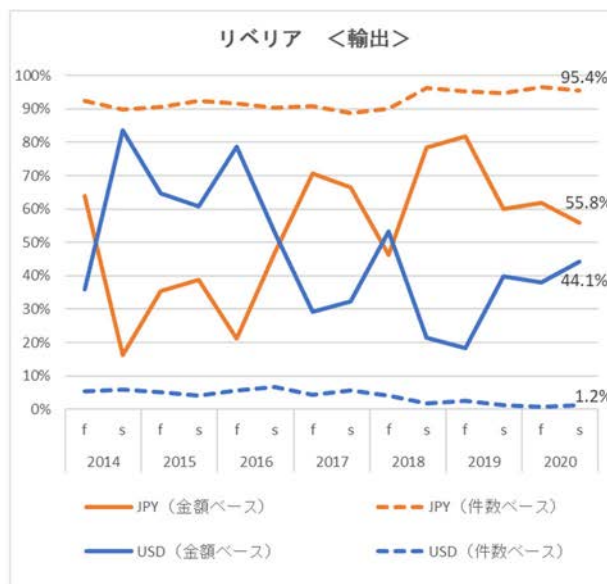


図4-34 リベリア向け輸出
インボイス通貨シェアの推移



V-2 輸入

V-2-1 アジアからの輸入

中国からの輸入においては、全期間を通じて金額ベース・件数ベースともドル建てシェアが最も高く、ドル建てのシェアは7割台で推移している（図5-1）。円建てシェアも2割台前半で推移しており、この傾向に大きな変化はない。人民元建てシェアは微増傾向にある。2014年前期に金額ベースで人民元シェアは2.0%だったが、2020年後期には5.0%となっている。金額ベースと件数ベースでシェアの差はほとんどない。

香港からの輸入においては、金額ベースでは円建てシェアが最も高く8割台前後で推移している（図5-2）。しかし、件数ベースではドル建てシェアが高く、6割前後となっている。件数ベースと金額ベースのシェアの差が大きいことから、金額が多い取引は円建て、金額が小さい取引はドル建てという傾向があることが示唆される。香港ドル建てシェアは、金額ベースでは少なく1%前後となっているが、件数ベースでは6%前後で推移している。

図5-1 中国からの輸入
インボイス通貨シェアの推移

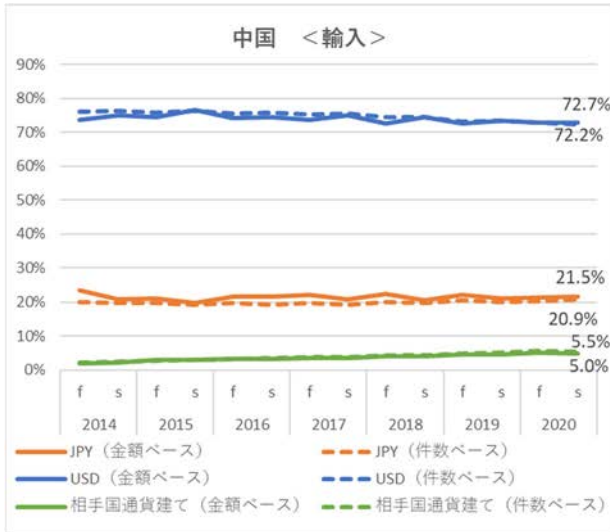
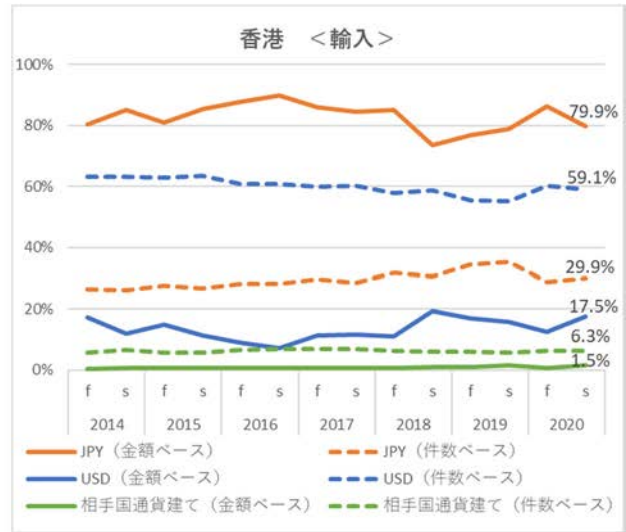


図5-2 香港からの輸入
インボイス通貨シェアの推移



韓国からの輸入においては、金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが最も高く、6割前後で推移している（図5-3）。円建てシェア（金額ベース）は、若干上昇傾向にある。2014年前期の55.8%から、2020年後期には59.2%まで上昇している。反対に、ドル建てシェアは緩やかな減少傾向にある。同期間に41.6%から36.7%まで低下している。ウォン建てシェアは、金額ベースでは2014年には2%台であったが、2015年後期以降は概ね3%台で推移している。件数ベースでは、2020年後期には7%台となった。金額ベースと件数ベースのシェアの差はさほど大きくない。

台湾からの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、金額ベースのドル建てシェアは概ね7割台で推移している（図5-4）。円建てシェアは、金額ベースでは25%前後、件数ベースでは若干高く30%台で推移している。台湾ドル建てシェアは金額ベースでは2%台、件数ベースでは5~6%で推移している。これらの状況は、全期間を通じて大きな変化は見られない。

図5-3 韓国からの輸入
インボイス通貨シェアの推移

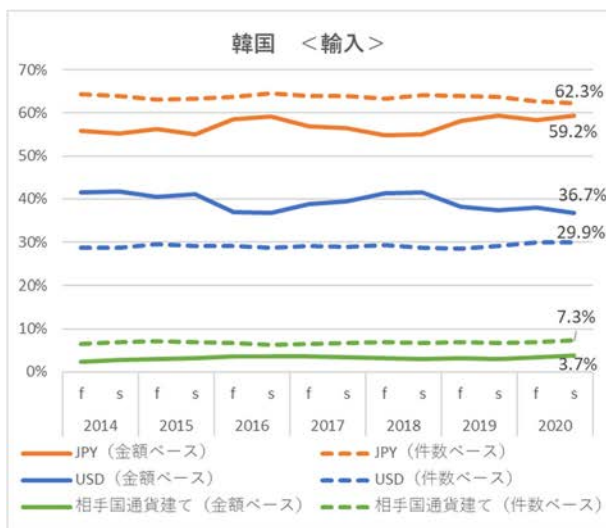
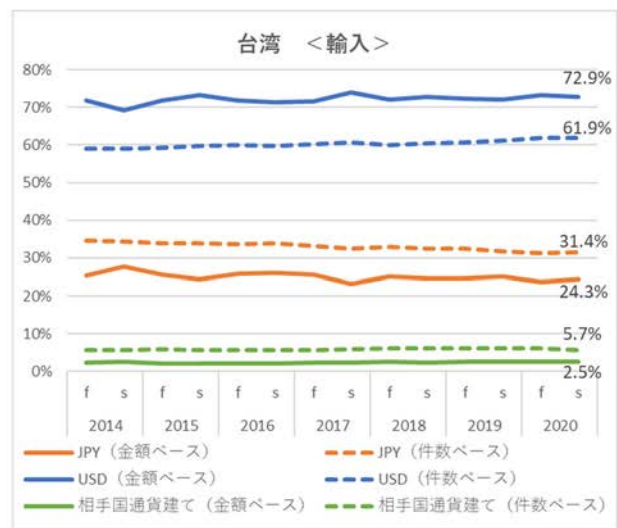


図5-4 台湾からの輸入
インボイス通貨シェアの推移



タイからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが一番高く、5割以上

となっている（図5-5）。しかし、金額ベースで見ると、ドル建てシェアは若干減少傾向にあり、2014年前期は52.4%だったが、2020年後期には49.0%となっている。円建てシェアは、この期間ほぼ変わらず30%台で推移している。タイパーツ建てシェアは緩やかな上昇傾向にある。2014年前期にタイパーツシェアは10.1%だったが、2020年前期には14%台となった。件数ベースにおいても、同期間に13.4%から17.2%に上昇した。金額ベースと件数ベースのシェアの差はさほどない。

マレーシアからの輸入においては、金額ベース・件数ベース共にドル建てシェアが最も高い（図5-6）。ドル建てシェアは上昇傾向にあり、2014年前期の48.7%から2020年後期には63.5%と上昇している。反対に、円建てシェアは減少傾向にあり、同期間に50.3%から33.9%まで減少した。マレーシアリングgitは輸入においてはほとんど使われておらず、金額ベースで1%前後、件数ベースでも3%前後となっている。金額ベースと件数ベースのシェアの差は、2018年以前は20%ポイント程度あり、件数ベースでドル建てシェアが高く、円建てシェアが低い、すなわち金額がまとまっていると円建て、少額取引はドル建てという特徴があったが、2018年以降はその差が縮小し、2020年にはほぼなくなった。

図5-5 タイからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

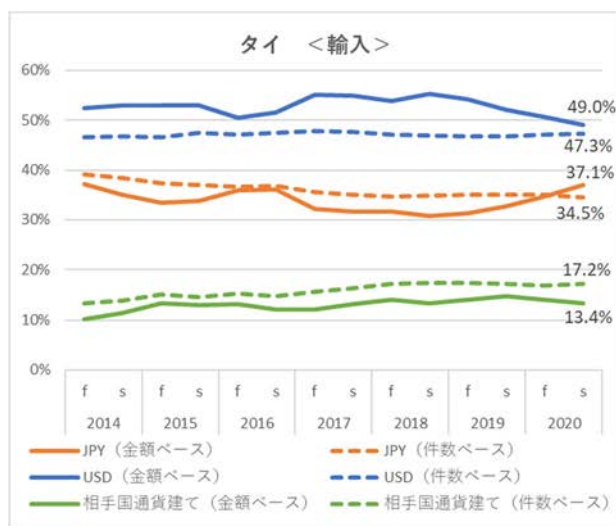
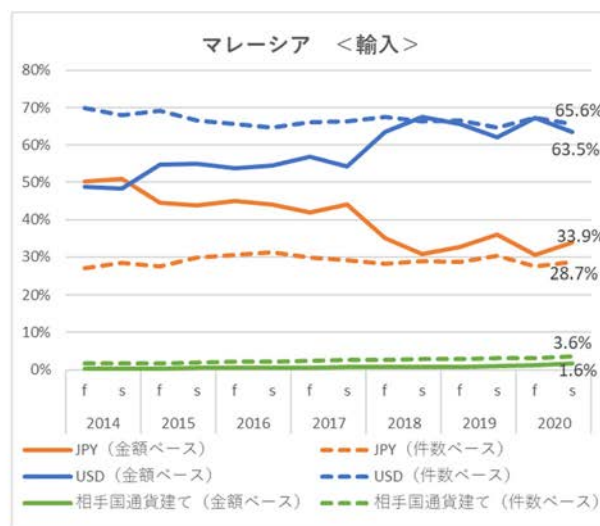


図5-6 マレーシアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



インドネシアからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともドル建てが最も高いが、そのシェアは減少傾向にある（図5-7）。2014年前期は75.2%だったドル建てシェア（金額ベース）は、2020年後期には61.3%まで低下している。反対に、円建てシェアは金額ベースで上昇傾向にある。2014年前期に23.9%だった円建てシェアは、2020年後期には37.0%まで上昇した。ただし件数ベースは、ドル建てシェアが7割強、円建てシェアが2割強で推移しており、大きな変化は見られない。インドネシアルピア建てのシェアは低く、2020年後期でも金額ベース・件数ベースともに1%台である。金額ベースと件数ベースのシェアの差は10%ポイント台とさほど大きくなく、円建てシェアでは金額ベースが高く、ドル建てベースでは件数ベースが高いという特徴がある。

シンガポールからの輸入においては、金額ベースでは2016年からドル建てシェアと円建てシェアが50%前後で拮抗している（図5-8）。しかし、2020年に両者の差が開き、円建てシェアがドル建てシェアを9%ポイントほど上回っている。また、全期間を通じて円建てシェアは上昇傾向にあり、2014年前期の40.0%から2020年後期には53.0%まで上昇した。反対に、ドル建てシェアは同期間に56.3%から43.7%まで低下している。シンガポールからの輸入においては、金額ベースと件数ベースの差が大きいという特徴がある。件数ベースではドル建てシェアが最も高く、6割以上であり、円建てシェアは25~32%で推移している。シンガポールドル建てシェアは金額ベースでは3%前後、件数ベースでも6~7%で推移しており、大きな変化は見られない。

図5-7 インドネシアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

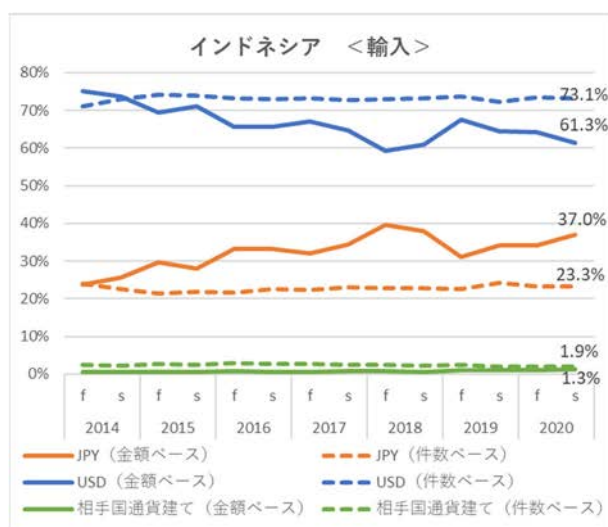
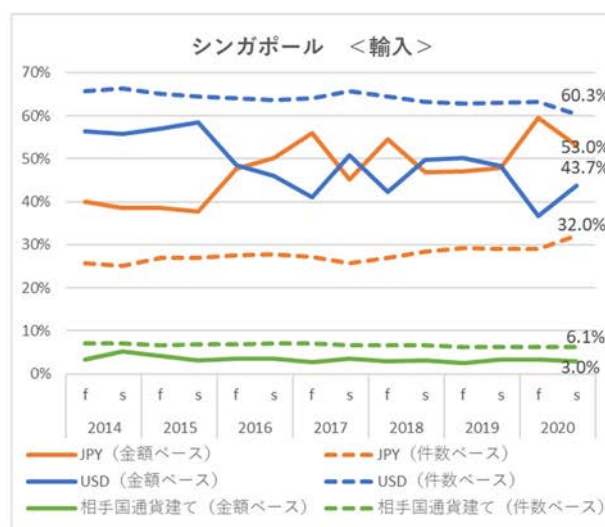


図5-8 シンガポールからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



フィリピンからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが最も高く6割弱を占めており、緩やかな上昇傾向にある（図5-9）。2014年前期で55.3%だったシェアは、2020年後期には59.2%に上昇している。反対に、金額ベースで4割台のドル建てシェアは若干低下傾向にある。2014年前期で43.9%だったシェアは、2020年後期には40.0%に低下している。金額ベースと件数ベースのシェアの差はさほど大きくない。フィリピンペソ建ての取引は金額ベース・件数ベースとも1%未満であり、ほとんど使われていない。

ベトナムからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高いが、そのシェアは明確な低下傾向にある（図5-10）。2014年前期には金額ベースで80.3%だったドル建てシェアは、2020年後期には65.4%まで低下している。反対に、円建てシェアは2014年前期の19.3%から2020年後期には34.2%まで上昇している。金額ベースと件数ベースのシェアの差は2014年当初はほぼ0だったが、円建てシェアが伸びるにつれてその差は開いている。円建てシェアにおいては、2020年には金額ベースのシェアが件数ベースのシェアを10%ポイント程度上回っており、ベトナムからの輸入が増えるにしたがってまとまった金額の輸入に対して円建て取引が増えていることが示唆される。ベトナムドン建てはほとんど使われていない。

図5-9 フィリピンからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

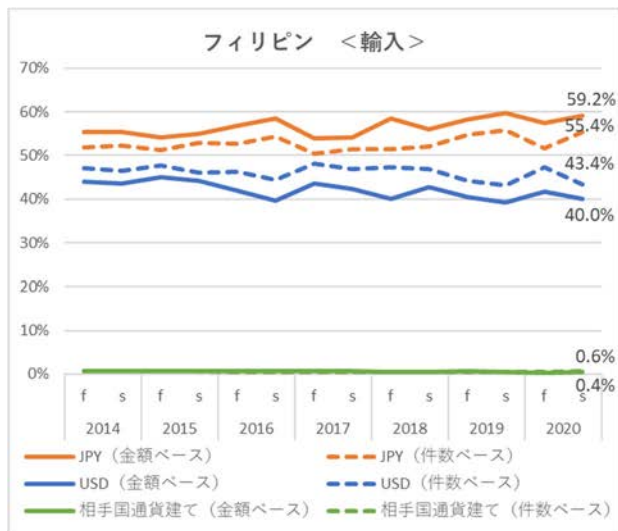
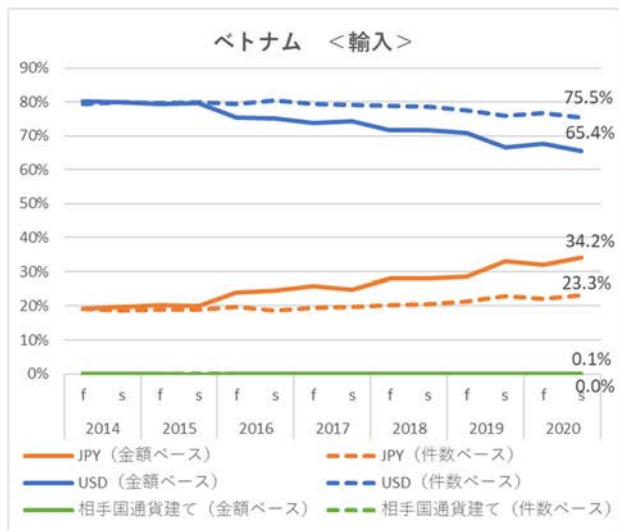
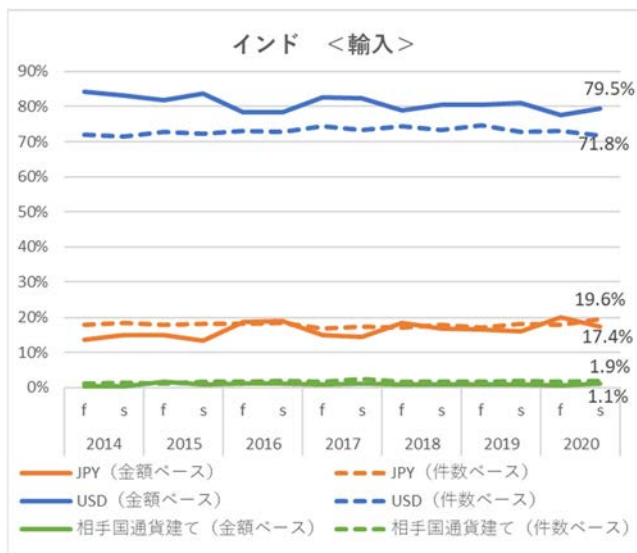


図5-10 ベトナムからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



インドからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、金額ベースで8割前後を占めている（図5-11）。円建てシェアは2割弱で推移しており、その傾向に大きな変化は見られない。インドルピー建てシェアは金額ベースで1%弱、件数ベースで2%弱となっており、あまり使われていない。金額ベースと件数ベースのシェアの差はあまりない。

図5-11 インドからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



V-2-2 オセアニアからの輸入

オーストラリアからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高い（図5-12）。ドル建てシェアは金額ベースで50%台を推移しており、円建てシェアの40%台を上回っている。2019年に一度両者はほぼ同じ水準になったが、2020年にはまたドル建てシェアが円建てシェアを上回る状況に戻っている。件数ベースになると、ドル建てシェアは6割弱を占め、円建てシェアの20%台前半と大きな差が開く。豪ドル建てシェアは、件数ベースでは二割弱と円建てシェアと拮抗し

ているが、金額ベースでは2%前後と低い。これらのことから、オーストラリアからの輸入においては、少額なものは豪ドル建てで行われており、まとまった金額のものは円建てで行われる傾向があることを示している。これは輸出のケースとは逆となっている。

ニュージーランドからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが最も高く、金額ベースで6割前後を占めている（図5-13）。ドル建てシェアは3割前後で推移しており、若干低下傾向にある。2014年前期には金額ベースで36.3%だったドル建てシェアは、2020年後期には27.2%に低下している。その代わりに、ニュージーランドドル建てシェアが緩やかな上昇傾向にある。ニュージーランドドル建てシェアは、2014年前期には金額ベースで6.5%、件数ベースで12.8%だったが、2020年後期にはそれぞれ13.7%と24.5%まで上昇した。金額ベースと件数ベースのシェアの差は、円建てでは金額ベースが多く、ニュージーランドドル建てでは件数ベースが多い。このことは、まとまった金額では円建てが、少額の取引ではニュージーランドドル建てが利用されていることを示唆している。

図5-12 オーストラリアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

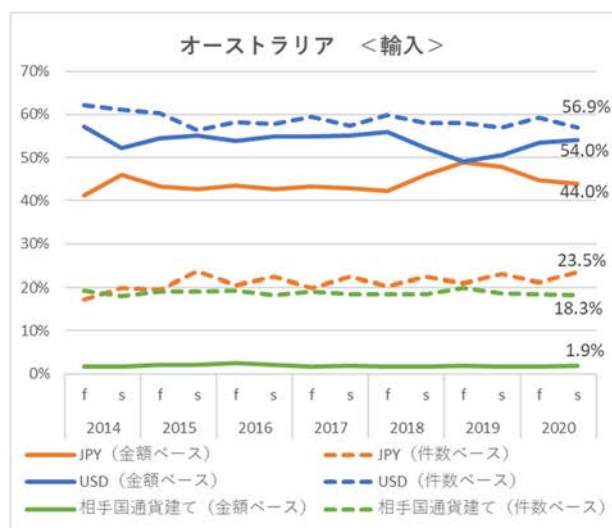
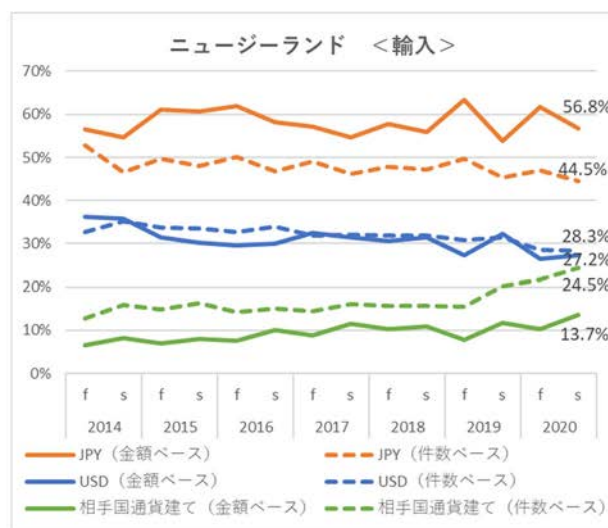


図5-13 ニュージーランドからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



V-2-4 欧州からの輸入

英国からの輸入においては、金額ベースでは円建てシェアが高く、件数ベースではポンド建てシェアが高いという特徴がある（図5-14）。それぞれの金額ベースのシェアは変動が激しく、円建てシェアは32%～46%の間、ドル建てシェアは22%～37%の間、ポンド建てシェアは15%～28%の間で変動している。件数ベースについては、ポンド建てシェアが4割前後、円建てシェアが3割前後、ドル建てシェアが2割前後で安定的に推移しており、大きな変化は見られない。金額ベースのシェアは円建てもしくはドル建てが高く、件数ベースのシェアはポンド建てが高いことから、金額がまとまった取引は円建てもしくはドル建て、少額取引はポンド建てで行われていることを示唆している。

スイスからの輸入については、金額ベースでは円建てシェアが最も高く、緩やかな上昇傾向にある（図5-15）。円建てシェアは、2014年前期には金額ベースで52.7%だったが、2020年後期には60.7%となった。スイスフラン建てシェアは、円建てに次いで2番目に高いが、若干低下傾向にある。2014年前期には金額ベースで32.9%だったシェアは、2020年後期には28.2%になっている。ドル建てシェアも穏やかな低下傾向にある。金額ベースで2014年前期に10.4%だったドル建てシェアは、2020年後期には6.4%まで低下している。金額ベースと件数ベースのシェアの差は円建てで大きい。金額ベースの円建てシェアは近年では6割で推移しているのに対して、件数ベースの円建てシェアは4割台となっている。このことは、比較的金額のまとまった取引で円建てが利用されていることを示唆している。

図5-14 英国からの輸入
インボイス通貨シェアの推移

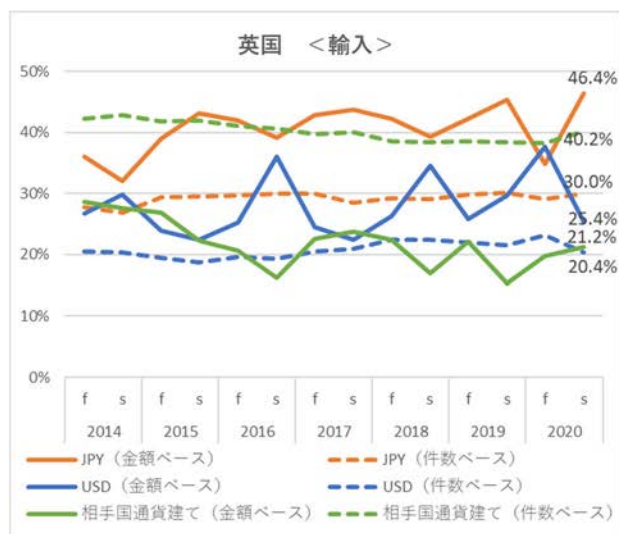
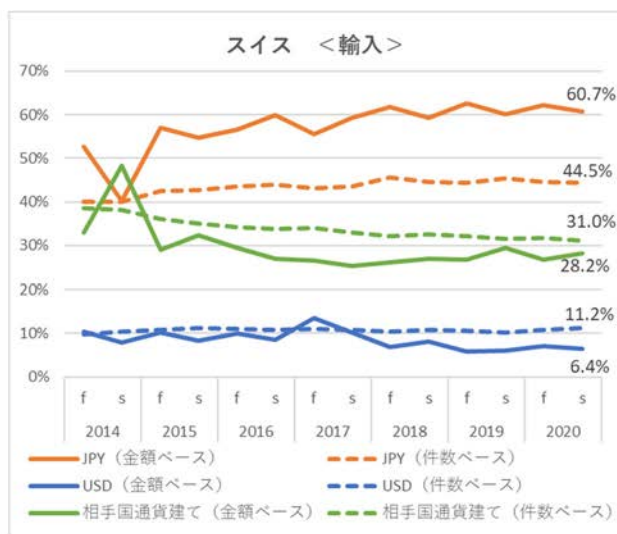


図5-15 スイスからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



ドイツからの輸入については、金額ベースでは円建てシェアが、件数ベースはユーロ建てシェアが最も高く、それぞれ50%台で推移している（図5-16）。件数ベースの円建てシェアと金額ベースのユーロ建てシェアもそれぞれ3割台で推移しており、大きな変化は見られない。ドル建てシェアは、金額ベース・件数ベースともに10%未満だが、緩やかな上昇傾向にある。2014年前期に金額ベースで6.0%だったドル建てシェアは、2020年には9%台まで上昇している。金額ベースでは円建てシェア高く、件数ベースではユーロ建てシェアが高いことから、金額がまとまった取引については円建て、少額取引についてはユーロ建てが使われる傾向があることを示唆している。

イタリアからの輸入については、金額ベースで見ると、円建てシェアが2016年にユーロ建てシェアを抜いてトップに立ち、その後も上昇傾向にある（図5-17）。2014年前期に円建てシェアは44.7%だったが、2020年後期に64.3%となった。反対にユーロ建てシェアは同期間に45.9%から28.4%に低下している。ドル建てシェアは全期間を通じて5%から8%の間で推移している。件数ベースではユーロ建てシェアが高く、2014年前期に6割を占めていたが、2020年後期には47.9%へと低下している。他方で円建てシェアは件数ベースでも上昇傾向にあり、2014年前期の33.6%から2020年後期には46.5%まで上昇した。イタリアからの輸入における貿易建値通貨選択については2016年から18年の間に大きな構造変化があったものと考えられる。

図5-16 ドイツからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

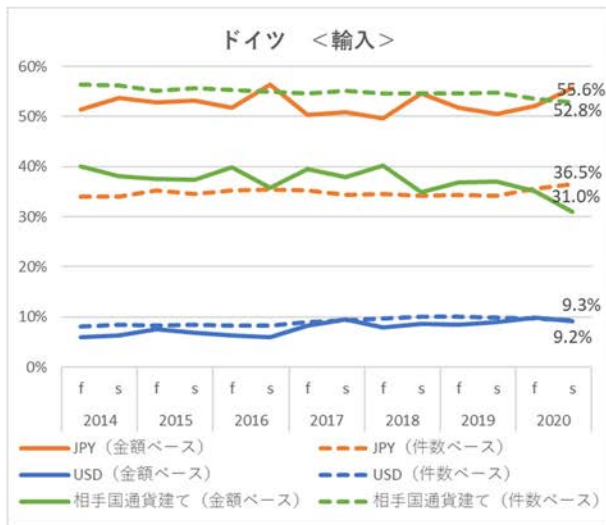
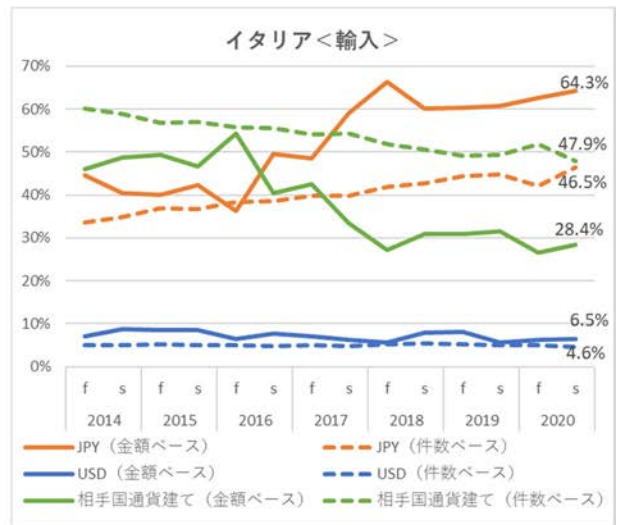


図5-17 イタリアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



フランスからの輸入については、金額ベースでは円建てシェアが最も高く、件数ベースはユーロ建てシェアが最も高い(図5-18)。金額ベースの円建てシェアは時期により変動が激しいが、2020年後期で52.5%である。金額ベースのユーロ建てシェアは低下傾向にあり、2014年後期には42.7%だったシェアは2017年後期には29.1%となっている。それに代わって、ドル建てシェアは近年緩やかな上昇傾向にある。2014年に金額ベースで10%前後だったドル建てシェアは、2020年後期には15.2%まで上昇している。他の欧州諸国と同様に、金額ベースでは円建てシェアが高く、件数ベースではユーロ建てシェアが高いことから、金額がまとまった取引については円建て、少額取引についてはユーロ建てが使われる傾向があることを示唆している。

スペインからの輸入についても、金額ベースでは円建てシェアが、件数ベースはユーロ建てシェアが最も高く、それぞれ4割から6割の間で推移している(図5-19)。件数ベースの円建てシェアと金額ベースのユーロ建てシェアもそれぞれ3割台で推移している。ドル建てシェアは、2015年以降は金額ベース・件数ベースともに概ね10%を下回る水準で推移している。その他の欧州諸国と同様に、金額ベースでは円建てシェアが高く、件数ベースではユーロ建てシェアが高いことから、金額がまとまった取引については円建て、少額取引についてはユーロ建てが使われる傾向があることを示唆している。

図5-18 フランスからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

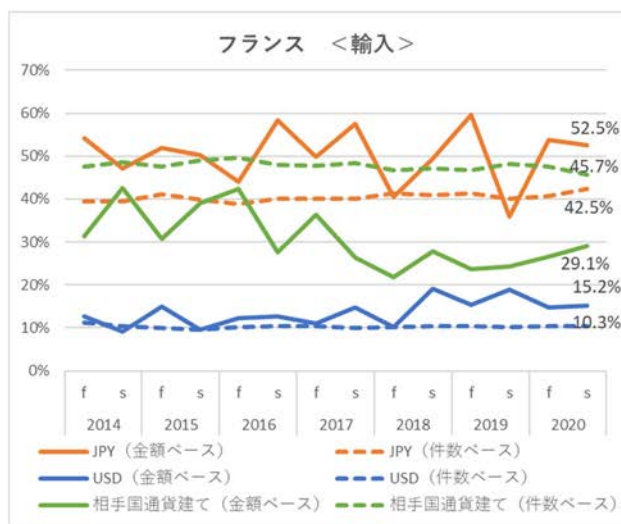
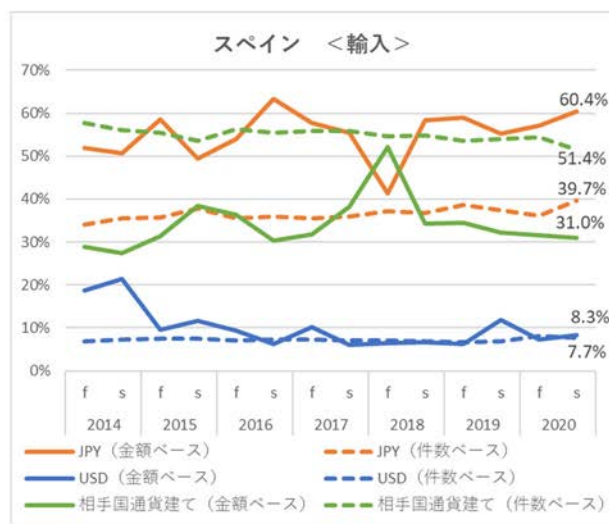


図5-19 スペインからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



アイルランドからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともに円建てシェアが最も高く、金額ベースで8割前後を占めているが、近年は若干低下傾向にあり、2020年後期は71.9%となっている（図5-20）。件数ベースの円建てシェアは6割前後で推移している。ドル建てシェアは緩やかな上昇傾向にあり、金額ベースでは2014年前期に11.6%だったシェアが2020年後期には22.8%に、件数ベースでは同期間に19.1%から30.2%に上昇している。ユーロ建てシェアは金額ベースでは10%未満、件数ベースでは10%前半で推移しており、あまり変化は見られない。

ベルギーからの輸入については、金額ベースでは円建てシェアが最も高く、件数ベースはユーロ建てシェアが最も高い（図5-21）。金額ベースの円建てシェアは2016年から2017年前期には6割台であったが、その後低下し2020年後期には45.9%となっている。金額ベースのユーロ建てシェアは2割前後、ドル建てシェアは1割前後で若干低下傾向にある。その代わりに、このグラフにはないがその他の欧州通貨利用がある。件数ベースではユーロ建てシェアが5割から6割の間で推移しており、円建てシェアの3割前後を大きく上回っている。他の欧州諸国と同様に、金額ベースでは円建てシェアが高く、件数ベースではユーロ建てシェアが高いことから、金額がまとまった取引については円建て、少額取引についてはユーロ建てが使われる傾向があることを示唆している。

図5-20 アイルランドからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

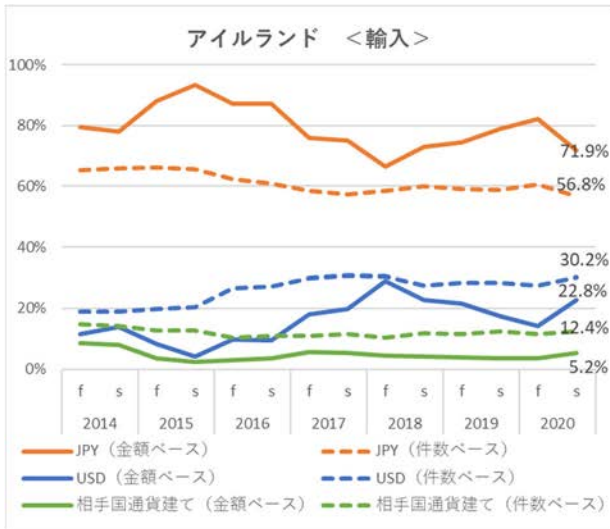
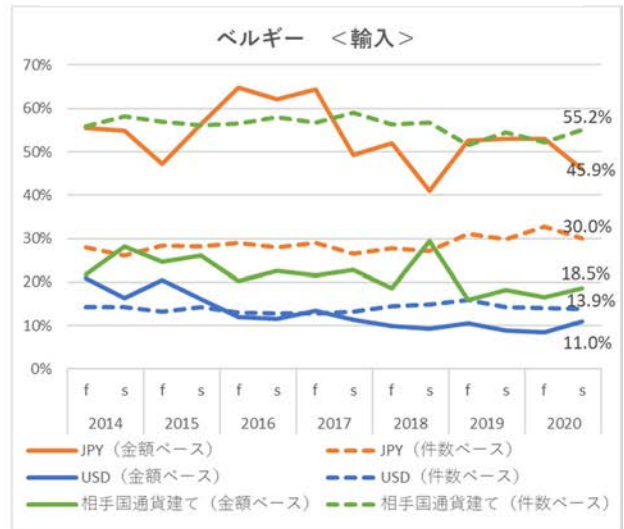


図5-21 ベルギーからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



オランダからの輸入においては、2016年以降は金額ベース・件数ベースともユーロ建てシェアが最も高く、金額ベースでは5割前後、件数ベースでは6割弱で推移している（図5-22）。円建てシェアは、2015年までは金額ベースで最も高く2014年には6割台だったが、その後低下し、2020年後期には36.2%となっている。ドル建てシェアは金額ベース・件数ベースとも概ね10%台前後で推移している。

スウェーデンからの輸入においては、金額ベースでは円建てシェアが最も高く、緩やかな上昇傾向にある（図5-21）。円建てシェアは、2014年前期には金額ベースで62.5%だったが、2020年後期には73.3%となった。件数ベースの円建てシェアは5割台半ばで推移している。ドル建てシェアとスウェーデンクローネ建てシェアは、どちらも金額ベースでは10%未満で、件数ベースでは概ね10%台で推移している。スウェーデンクローネ建てシェアは金額ベースでは若干低下傾向にあり、2014年前期に8.3%だったシェアは、2020年後期には4.2%となっている。

図5-22 オランダからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

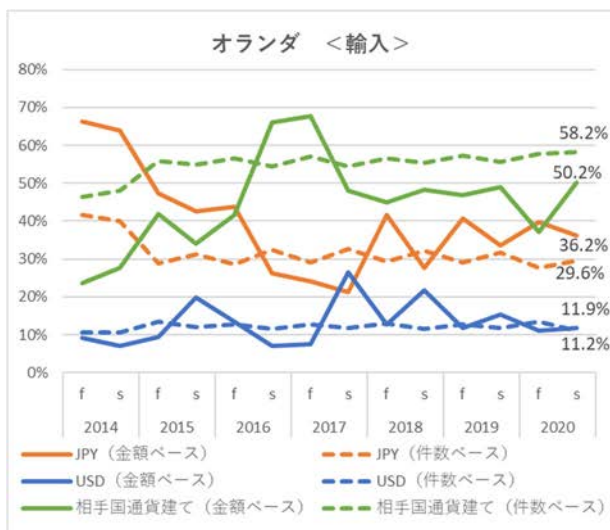
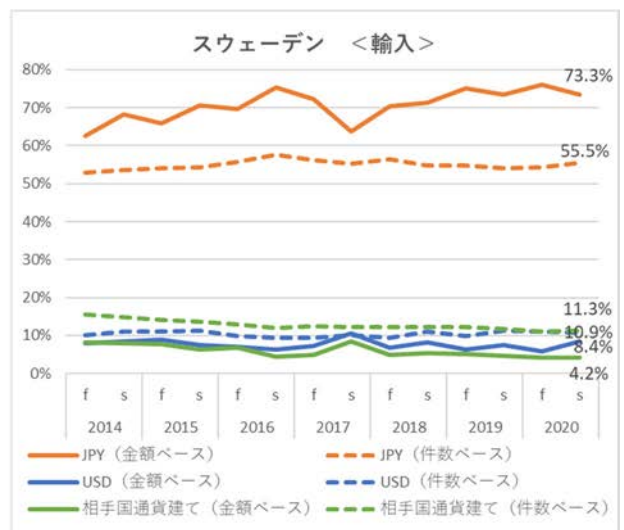


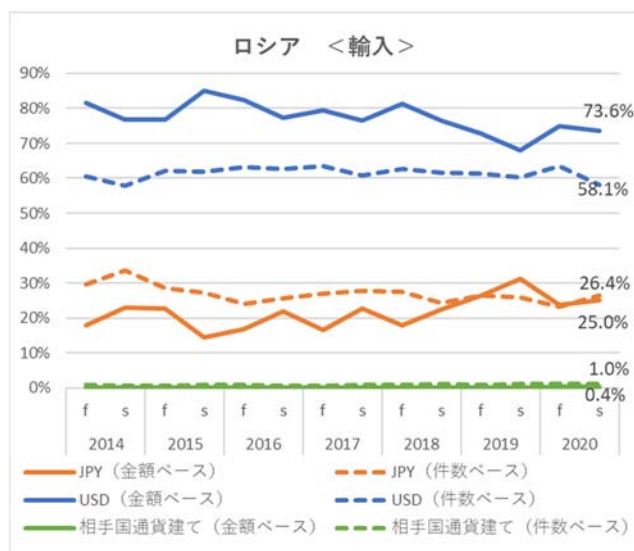
図5-23 スウェーデンからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



ロシアからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともドル建てシェアが最も高く、金額ベー

スでは7割から8割台、件数ベースでは6割前後で推移している（図5-24）。ドル建てシェアは金額ベースでは若干低下傾向にあり、2014年前期に81.5%だったシェアは2020年後期には73.6%となっている。円建てシェアは、金額ベースでは緩やかな上昇傾向にあり、2014年前期に18.0%だったシェアは2020年後期には25.0%となっている。輸出の場合と異なり、ロシアルーブル建てはほとんど使われておらず、件数ベースでも1%前後である。

図5-24 ロシアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



V-2-5 北米、および中南米からの輸入

米国からの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、金額ベースで7割台、件数ベースでは8割台を占めている（図5-25）。金額ベースのドル建てシェアは若干低下傾向にあり、2014年前期に75.7%だったシェアは2020年後期には71.5%となっている。円建てシェアは金額ベースで2割台、件数ベースでは1割台で推移している。どちらもわずかながら緩やかな上昇傾向にあり、2014年前期にそれぞれ23.1%と15.6%だったシェアは2020年後期にはそれぞれ27.7%と18.0%となっている。基本的にはほとんど変化は見られない。

カナダからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、金額ベースで5割から6割台、件数ベースでは6割台を占めている（図5-26）。ただし、金額ベースのドル建てシェアは低下傾向にあり、2014年前期の63.5%から2020年後期には50.6%へと低下している。これに代わって、円建てシェアは金額ベースでは明確な上昇傾向にある。2014年前期に32.2%だったシェアは2020年後期には45.1%まで上昇している。件数ベースの円建てシェアは、20%前後と低い。カナダドル建てシェアは金額ベースでは5%未満、件数ベースでは10%前後である。円建てシェアは2020年後期で金額ベースが件数ベースを22%ポイントほど上回り、ドル建てとカナダドル建てはその逆になっていることから、金額がまとまった取引は円建てで、少額取引はドル建て、あるいはカナダドル建てで行う傾向があることを示唆している。

図5-25 米国からの輸入
インボイス通貨シェアの推移

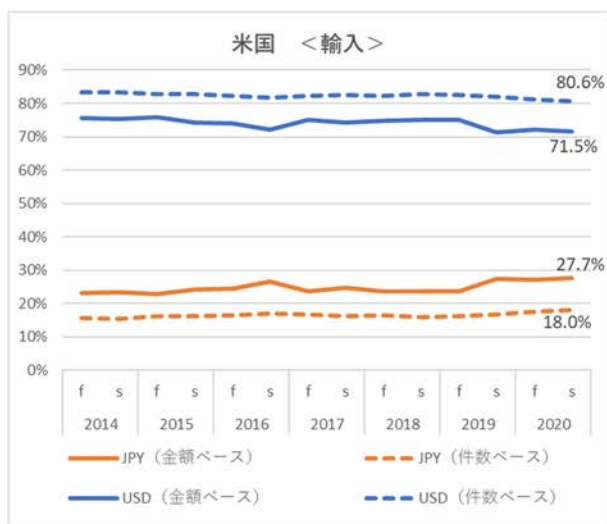
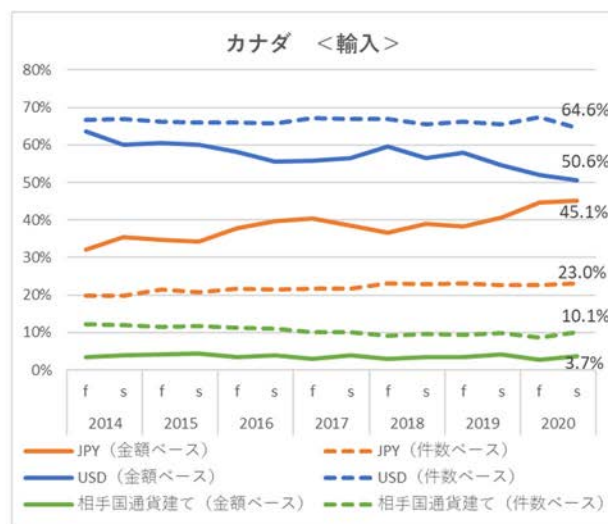


図5-26 カナダからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



メキシコからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、件数ベースでは7割前後を占めているが、金額ベースのシェアは2018年から低下傾向にある（図5-27）。2016年には8割弱あったドル建てシェアは2020年後期には54.6%まで低下した。これに代わって、円建てシェアは金額ベースでは同時期に上昇した。2016年後期に2割を割り込んだシェアは2020年後期には44.0%まで上昇している。メキシコペソ建てシェアは金額ベース・件数ベースどちらも1%未満であり、ほとんど使われていない。金額ベースと件数ベースにおけるシェアの差はあまりなかったが、2019年から2020年にかけて差が広がってきている。

ブラジルからの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、どちらも8割前後で推移している（図5-28）。円建てシェアは金額ベースで20%から30%の間で、件数ベースで概ね10%から20%の間で推移している。ブラジルリアル建てシェアは金額ベース・件数ベースどちらも1%未満であり、ほとんど使われていない。これらの傾向に大きな変化は見られない。

図5-27 メキシコからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

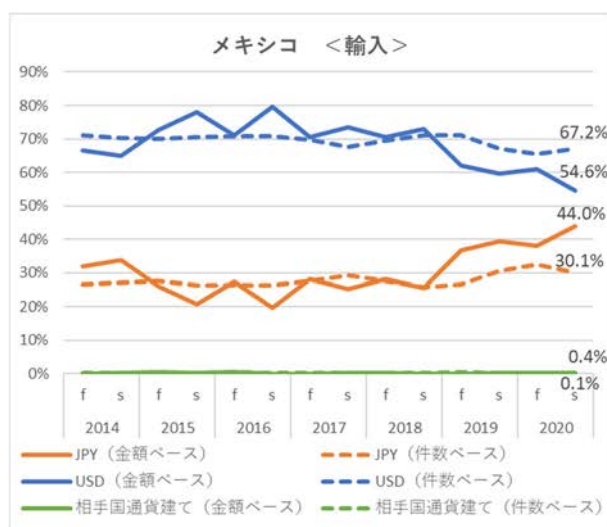
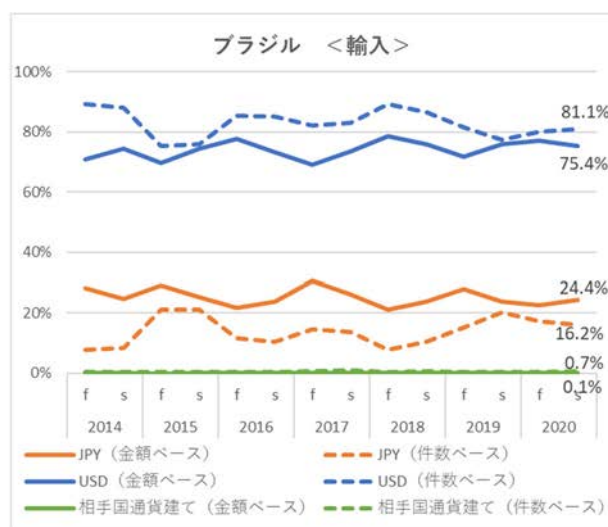


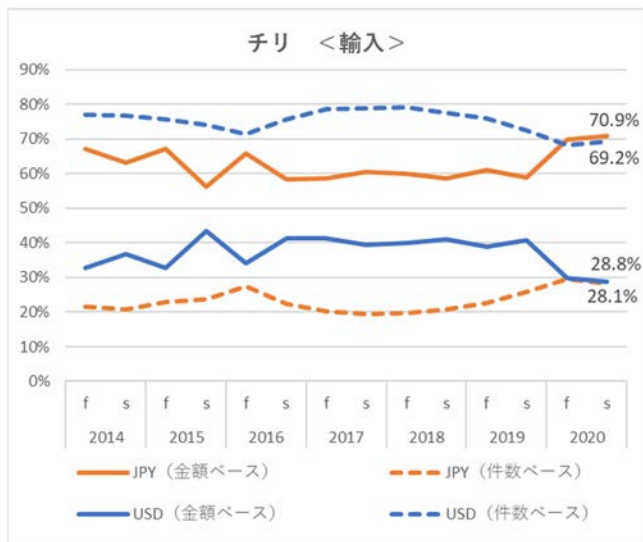
図5-28 ブラジルからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



チリからの輸入では、金額ベースで円建てシェアが最も高く、概ね6割から7割の間を推移している（図5-29）。円建てシェアは近年上昇傾向にあり、6割前後だったシェアが2020年後期には70.9%とな

っている。その代わりに、ドル建てシェアは金額ベースで近年低下傾向にあり、4割前後だったシェアが2020年後期には28.8%となっている。ただし、件数ベースではドル建てシェアが最も高く7割前後で推移しており、円建てシェアは3割を下回っている。このことは、金額がまとまった取引は円建てで、少額取引はドル建てで行う傾向があることを示唆している。チリペソはほとんど使われていない。

図5-29 チリからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



V-2-6 その他地域からの輸入

アラブ首長国連邦 (UAE) からの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、特に金額ベースでは2014年前期に84.3%だったシェアが2020年後期には96.3%となっている (図5-30)。これに代わって、円建てシェアは金額ベースで2014年の20%前後から2020年後期には3.7%まで下落した。UAEからの輸入における相手国通貨建てシェアは金額ベースで1%未満であり、ほとんど使われていない。

サウジアラビアからの輸入においても、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、特に金額ベースのドル建てシェアはほぼ100%に近い数値で推移している (図5-31)。円建てシェアは、金額ベースでは2%前後であり、件数ベースでは20%弱となっている。円建てシェアは件数ベースのシェアが金額ベースのシェアを上回っており、ドル建てシェアはその逆になっているため、比較的少額の取引では若干円建てが使われる傾向があることが示唆される。サウジアラビアの相手国通貨建てシェアは1%未満であり、ほとんど使われていない。

図5-30 アラブ首長国連邦からの輸入
インボイス通貨シェアの推移

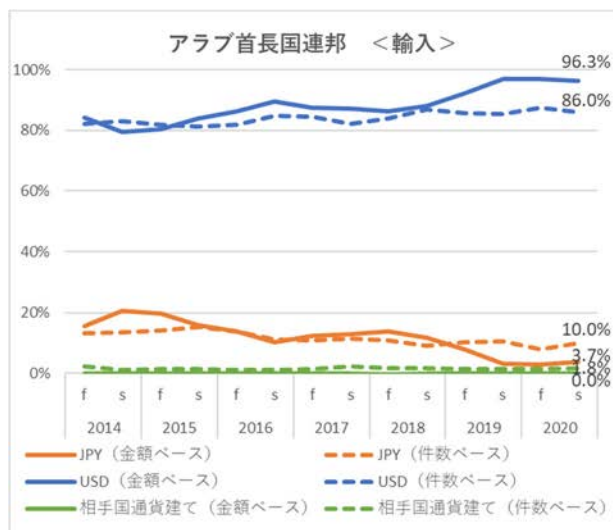
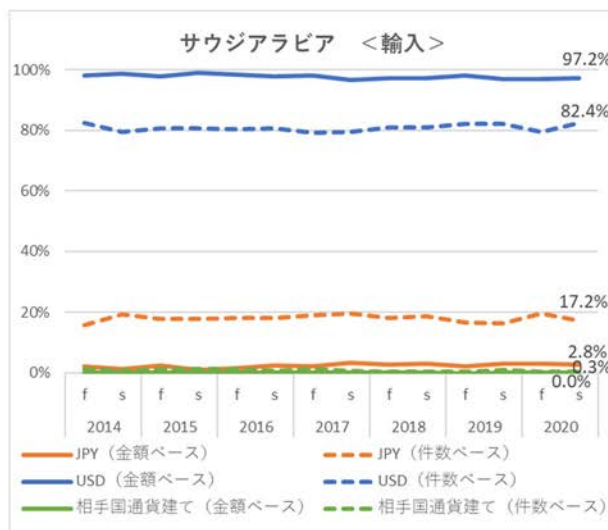


図5-31 サウジアラビアからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



他の産油国からの輸入と同様に、クウェートからの輸入においても、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、特に金額ベースのドル建てシェアはほぼ100%に近い数値で推移している（図5-32）。円建てシェアは、金額ベースでは2%前後であり、件数ベースでも10%未満となっている。クウェートの相手国通貨建てシェアは金額ベースで1%未満であり、ほとんど使われていない。

カタールからの輸入においても、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、9割以上を占めている（図5-33）。金額ベースのドル建てシェアはほぼ100%に近い数値で推移している。円建てシェアは、金額ベースでは2%前後であり、件数ベースでも10%未満となっている。カタールの相手国通貨建てシェアは1%未満であり、ほとんど使われていない。

図5-32 クウェートからの輸入
インボイス通貨シェアの推移

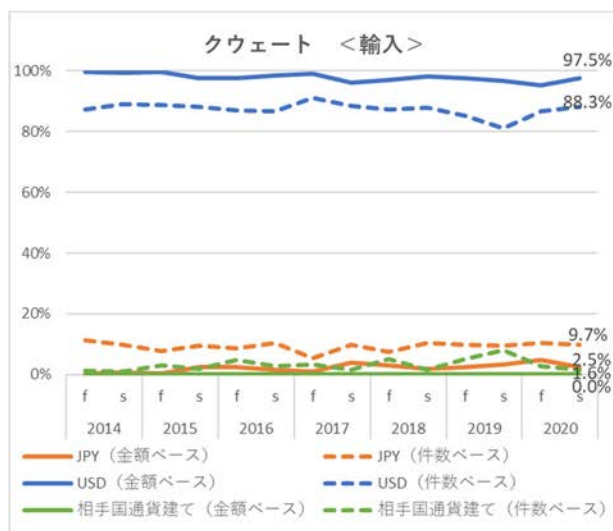
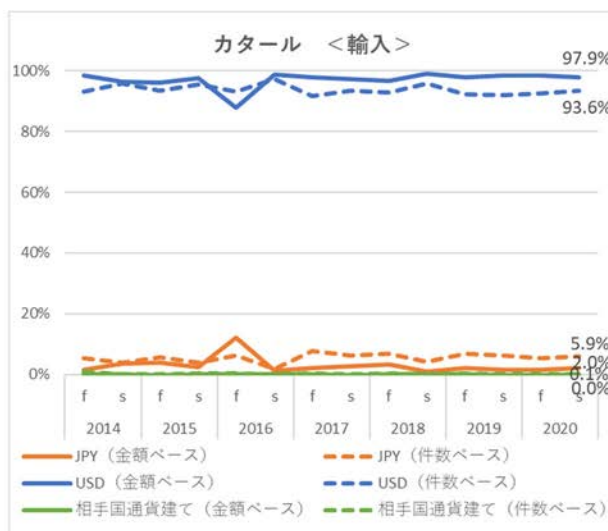


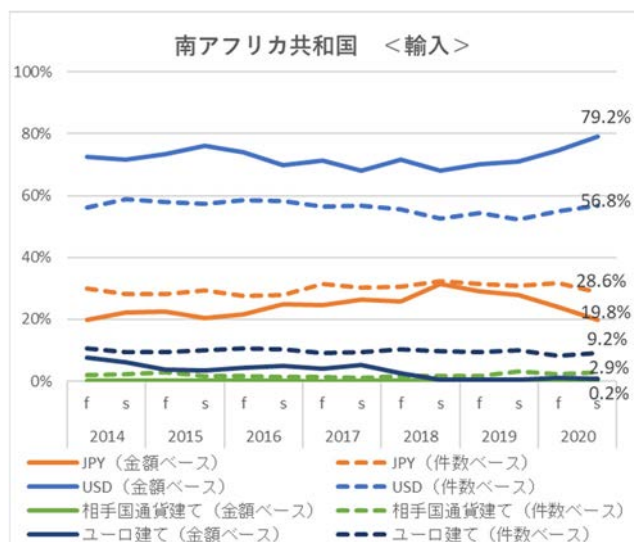
図5-33 カタールからの輸入
インボイス通貨シェアの推移



南アフリカ共和国からの輸入においては、金額ベース・件数ベースともにドル建てシェアが最も高く、金額ベースでは2014年前期の72.4%から2020年後期の79.2%へと上昇している（図5-34）。件数ベースのドル建てシェアは6割弱で推移している。件数ベースの円建てシェアは安定的に推移しており、2020年後期に28.6%であるが、金額ベースのシェアは2018年から低下傾向にあり、2020年後期に19.8%

となっている。南アフリカ共和国では、輸出の場合と同様にユーロ建てでも使われており、件数ベースでは10%近くシェアがあるが、金額ベースでは近年は1%未満となっている。ランド建てシェアは件数ベースでは2%前後だが、金額ベースでは1%未満と小さい。

図5-34 南アフリカ共和国からの輸入
インボイス通貨シェアの推移



VI. 政策インプリケーションと今後の課題

本研究では、輸出、輸入ともに上位 34 か国の貿易建値通貨選択の特徴を概観した。全体の傾向としては、輸出入ともドル建てシェアが低下傾向にあり、その傾向は輸出において顕著であることが確認された。貿易建値通貨比率には、輸出入の差だけでなく、地域別でそれぞれの特徴が表れている。以下、輸出入ごとに地域別の特徴を整理する⁴⁾。

アジア向けの輸出：

- 同じ東アジア諸国、かつ貿易相手国上位であっても、ドル建てが優位の中国、インドネシア・シンガポール・フィリピン・ベトナム・インド、円建てが優位の韓国、ドル建てと円建てがほぼ拮抗している香港、台湾、タイ、マレーシアに分かれる。その要因が何によるものなのか——例えば、主要な輸出品目の違いか、価格競争力の違いか——についてはさらに分析する必要がある。
- 近年、特にアジア向け輸出においては、米ドル建てシェアが減少し、円建てと相手国通貨建てのシェアが増加している。特に相手国通貨の中では、人民元・タイバーツ・インドルピーで増加が顕著であることが確認された。一方で、近年輸出金額が増えている台湾やベトナム向け輸出ではドル建てシェアが増えており、アジア全体のデータでまとめるとドル建てシェアが変化していない状況になっている。アジア地域を集計したデータでは見えない、国別の特徴がわかるようになったのは、本研究の大きな意義である。ただし、この国別の違いが何

⁴⁾ なお、個別の国において短期間に貿易建値通貨シェアが大きく変化している国が見られた。これらについては、取引件数に大きな変動がないことから、何らかの理由で特別な財の貿易の貿易量が特異的に増加した、あるいは貿易建値通貨の変更が行われたことなどが背景にある可能性が高い。通貨建てシェアの大きな変動を説明するときに、伝統的にドル建て、円建て、相手国通貨建てになっている商品の輸出額(量)が増加してシェアが変わるのか、伝統的にドル建てだった商品が円建てに変わったことによるのか、の区別をすることは重要であるが、これらの詳しい分析については、今後の課題とする。

に起因しているかの究明はこれからである。

- アジア向けの輸出については、金額ベースと件数ベースのシェアの差に特徴がみられる。円建てシェアは件数ベースでより多く、ドル建てシェアは件数ベースでは少ないという傾向がある。このことは、企業内貿易などで金額がまとまっている取引についてはドル建て、比較的少額の取引について円建てで行われている傾向があることを示唆している。これも本研究の新しい発見である。

オセアニア向け輸出

- オーストラリア、ニュージーランドはどちらも先進国通貨であることから、両国向け輸出においては主に相手国通貨建てや円建てが使われており、その傾向が強くなっている。この両国向け輸出のように相手国通貨がハードカレンシーである場合には、米ドルは3番目の通貨としての位置づけになる。

欧州向け輸出

- ユーロ導入国向け輸出では、金額ベースではユーロ建てシェアが最も高く、次いで円建てシェアという順番になっている国がほとんどである。ただし、件数ベースになると円建てシェアが高まり、ユーロ建てと拮抗している。このことは、比較的少額な取引では円、まとまった金額ではユーロ建てを使うという傾向が欧州向け輸出でも見られることが明らかになった。
- 英国やスイスなど非ユーロ採用国では、円、ユーロ、相手国通貨に加えてドル建てシェアが他の欧州国よりも高い傾向にある。
- 東欧諸国やトルコ向け輸出では、ユーロ建てが主に使われている。トルコではその傾向が近年強まっている。
- ロシア向け輸出では、金額ベースではロシアルーブル建てシェアが最も高く、全期間において30%以上を維持している。ただし件数ベースでのルーブル建てシェアは金額ベースと比較すると20%ほど低くなる。また、件数ベースでは円建てシェアが最も高いという特徴があることから、まとまった金額の輸出にルーブル建てが、比較的少額取引は円建てが使われている傾向があることを示唆している。

北米、および中南米向け輸出

- 米国、カナダ、メキシコ向けの輸出では金額ベース、件数ベースともドル建てシェアが高く、米国ではその傾向に大きな変化は見られない。ただし、近年カナダやメキシコではドル建てから相手国通貨建てであるカナダドルやメキシコペソ建てに変化する傾向も見られる。ブラジルでもドル建てが低下し、円建てとブラジルリアル建てが増える傾向がある。

その他地域向け輸出

- 産油国向け輸出では円建てシェアが最も高い傾向にある。これについては、日本企業が中東諸国向けに差別化された財を円建てで輸出していることが示唆される。
- 南アフリカ共和国向けでは、円建てのほかにユーロ建ても使われている。

次に、輸入について地域別の主な特徴についてまとめる。輸入については、貿易相手国上位にいる米国と資源国との貿易でドル建てがメインであることが全体においてドル建てシェアを高めており、あまり変化が見られないことの背景となっている。

アジアからの輸入

- 輸入においては米ドル建てシェアが一番高い国が輸出の場合よりも多くなる。円建てが優位なのは香港、韓国、シンガポール、フィリピンで、それ以外はすべてドル建てが優位となっている。その中でも、台湾とマレーシアでは近年さらにドル建てシェアが高まり、円建てシ

シェアが低下する傾向にある。電子・電気部品などのドル建てでの取引慣行がある財の輸入が多いことがその理由ではないかと推察される。

- アジアからの輸入で、ドル建てが減少し円建てが増えている国は韓国、インドネシア、シンガポール、フィリピン、ベトナム、インドである。どのような理由で貿易建値通貨のドルから円へのシフトが起こっているのか（あるいは単にドルで輸入している財の金額が減り、円で輸入する財の金額が増えているだけかもしれない）については、より詳細に分析する必要があるだろう。
- 金額ベースと件数ベースのシェアの差について、多くの国と地域で円建てシェアが金額ベースで高く、件数ベースで低いという傾向が見られる。この傾向は輸出とは対照的であり、アジア以外の多くの国からの輸入においても観察されている。

オセアニアからの輸入

- 輸出の場合と異なり、輸入についてはドル建てが相手国通貨よりも使われるようになる。これは輸入品における一次産品のシェアが高いためと考えられる。オーストラリアでは目立った変化は見られないが、ニュージーランドでは、わずかではあるがドル建てが減り、ニュージーランドドル建てが増える傾向にある。

欧州からの輸入

- 欧州では、フランス、アイルランド、ベルギー、オランダを除いては、円建てシェアが増加傾向にある。特に、英国とスイスでは輸出入ともドル建てシェアが減少し、円建てと相手国通貨建てシェアが顕著に増えている。欧州の国々からの輸入で円建てシェアがその他地域の輸入と比較して高くなっているのは、欧州企業が日本の顧客に対して PTM 戦略を採っている表れであると推察される。ただし、その推移は国毎に様々であり、更なる分析が必要となる。
- 欧州では、金額ベースでは円建てが多く、件数ベースではユーロ建てが多いという特徴がみられる。これが欧州企業の PTM 戦略とどのように関係しているのかなどについては、さらなる分析が必要となる。
- ロシアからの輸入はドル建てが高くなる。これは資源輸入が多いということが主因と考えられる。

北米、および中南米からの輸入

- 米国からの輸入については、変化は少ないながらも、ドル建てシェアが低下し、円建てシェアが上昇する傾向にある。これが何によるもので、この傾向が今後も続くのかどうかについては、日本にとって 2 番目の輸入相手国であるだけに、特に分析が必要となるだろう。
- カナダ、およびメキシコからの輸入についても、2019 年以降顕著にドル建てシェアが減少し、円建てシェアが増加している。この時期は NAFTA の再交渉から USNCA が暫定合意した時期と同じである。このことが貿易建値通貨の変更に何らかの影響を与えているのかどうかについては、今後分析が必要となる。

その他地域からの輸入

- 資源輸入金額が高い中東からの輸入では、ドル建てシェアがほぼ 100%に近い状態が続いており、変化は見られない。南アフリカ共和国からの輸入も同様にドル建て優位が続き、シェアも上昇傾向にある。こうした資源輸入におけるドル建て選好の強さが日本の輸入におけるドル建て優位を継続させている。

従来公表されてきた地域別の貿易建値通貨シェアデータでは、ドル建てシェアが高いという日本企業の貿易建値通貨選択には大きな変化が見られなかった。また、伊藤、他（2010, 2011, 2015, 2016, 2017, 2019）が行ってきた企業アンケート調査においても「インボイス通貨の変更はあまり行わない」という回答が多かった。しかし、今回の税関申告データを用いた各国別の分析では、2014 年から 2020 年

までの各国別の輸出入取引において、貿易建値通貨比率に一定程度の変化がみられることが確認された。その背景については、様々な理由が考えられる。例えば、アジアとの取引においてドル建てが減少し、相手国通貨建てであるアジア通貨建て取引が増加する傾向にあることについては、アジアに展開するサプライチェーンの企業内貿易において、輸出先の相手国通貨を利用することで現地法人の為替リスクを緩和する戦略を取り始めていることが推察される。また、対欧州の取引では、特に輸入面では円建てが増えており、欧州企業の日本に対する PTM 戦略が強くなっていることを示唆している。相手国通貨が取引コストの低い先進国通貨の場合には、当該国との取引相手の重要性が貿易建値通貨の選択に大きな影響を与える。一方で、米国やドイツなど、あまり大きな変化が見られない国もある。

本研究により明らかとなった国別の貿易建値通貨比率では、従来公表されていた世界全体、あるいは地域別の通貨シェアデータと比較して円建てシェアが高いことが示された。日本の輸出入については、他の先進国と比較してドル建てシェアが高く、円はあまり使われていないという印象が強かったが、これには貿易額の多い米国、中国や資源国での通貨選択が大きく影響していることが確認された。このように各国別で見た場合、円を貿易建値通貨として選択しているケースが貿易金額ベースで一定程度確認され、取引件数ベースではさらに多く確認されたという、新たに発見された事実を公表することは、学界、産業界双方にとって大きな貢献となる。相手国通貨建て利用についても、同様のことがいえる。例えば、タイバーツについては、これまでのデータ開示ではアジア向け輸出においては1%前後のシェアしかないが、2020年のタイ向け輸出においては金額ベースで16%、件数ベースでは17%も使われていることが分かった。特に日本から各国への輸出においては、先進国通貨の豪ドル（以下2020年の金額ベースシェアの数値、61.7%）、カナダドル（46.8%）、ニュージーランドドル（36.8%）のみならず、新興国通貨のロシアルーブル（37.2%）、メキシコペソ（11.7%）、人民元（10.4%）、インドルピー（9.6%）、ブラジルリアル（8.9%）なども一定程度使われていることが示せた。このような情報は、特に新たにこれらの国と交易を開始する企業にとっては有益な情報であり、データとして整備し、分析することの意義は大きい。

2019年以降に発生した米中貿易戦争、翌年からの新型コロナウイルスの感染拡大と半導体など中間財の供給不足、ロシア・ウクライナ危機による資源価格の高騰などが日本企業のサプライチェーン再編や貿易財の変化（自動車関連部品が減少し、電子部品が増加）を引き起こしている。2022年初頭以降顕著となった円安トレンドは、今後サプライチェーンの一部を国内回帰することなども含めて、日本の輸出入にさらに大きな構造変化をもたらす可能性がある。どのような要因がドル建てを愛好させるのか、あるいは円建てや相手国通貨建て取引を促進するのかについては、貿易相手国別に貿易財の種類（品目別や工程間別）や貿易相手（企業内貿易か企業間貿易か）、相手国通貨の変動や為替制度などの情報を組み合わせ、貿易建値通貨選択の要因分析を行う必要があるだろう。これについては、次の分析の課題としたい。

参考文献

- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子(2010)「日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択—平成 21 年度日本企業の貿易建値通貨の選択に関するアンケート調査結果概要—」、RIETI Discussion Paper 10-J-032.
- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子(2011)「貿易ネットワークにおけるインボイス通貨選択と為替リスク管理:平成 22 年度日本企業海外現地法人アンケート調査結果概要」、RIETI Discussion Paper 11-J-070.
- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子(2015)「日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択:平成 26 年度「日本企業の海外現地法人に対するインボイス通貨選択アンケート調査」結果概要」、RIETI Discussion Paper 15-J-054.
- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子(2016)「日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択 「平成 25 年度 日本企業の貿易建値通貨の選択に関するアンケート調査」結果概要」、RIETI Discussion Paper 16-J-035.
- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子(2017)「日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択: 「2017 年度日本企業の貿易建値通貨の選択に関するアンケート調査結果」、RIETI Discussion Paper 18-J-025.
- 伊藤 隆敏、鯉渕 賢、佐藤 清隆、清水順子、吉見太洋(2019)「日本企業の為替リスク管理とインボイス通貨選択 平成 30 年度日本企業の海外現地法人アンケート調査結果概要」 RIETI Discussion Paper 19-J-042.
- 清水順子・伊藤隆敏・鯉渕賢・佐藤清隆(2021)『日本企業の為替リスク管理 通貨選択の合理性・戦略・パズル』, 日本経済新聞出版.
- Grassman, S. (1973) “A Fundamental Symmetry in International Payment Patterns,” *Journal of International Economics*, Vol.3, Issue 2, pp.105–116.
- Grassman, S. (1976) “Currency Distribution and Forward Cover in Foreign Trade: Sweden Revisited, 1973,” *Journal of International Economics*, Vol.6, Issue 2, pp.215–221.
- Page, S. A. B. (1977) “Currency of Invoicing in Merchandise Trade,” *National Institute Economic Review*, 33, pp.1241–1264.
- Page, S. A. B. (1981) “The Choice of Invoicing Currency in Merchandise Trade,” *National Institute Economic Review*, 85, pp.60–72.
- Ito, T., S. Koibuchi, K. Sato and J. Shimizu (2018) *Managing Currency Risk: How Japanese Firms Choose Invoicing Currency*, Edward Elgar.
- Ito, T., S. Koibuchi, K. Sato, J. Shimizu and T. Yoshimi (2021) “The Dollar, the Yen, or the RMB? A Survey Data Analysis of Invoicing Currencies among Japanese Overseas Subsidiaries,” RIETI Discussion Papers, 21-E-016.
- McKinnon, R. I. (1979) *Money in International Exchange: The Convertible Currency System*, Oxford University Press.

補論 本研究で利用した輸出入申告データに関する解説

我が国税関が保有する輸出入申告データを活用した学術研究は、本研究を含む「第1期輸出入申告データを活用した共同研究」が史上初であるため、各データの意味や解釈を含め学術研究上未知のデータを扱うこととなった。

今後、学術研究等における輸出入申告データの利用が一層期待される中、研究を通じて発見されたデータ利用上の手法や注意点等を、将来の研究において参照可能な形にしておくことが、行政データの利活用を推進する上で極めて重要である。

そこで以下では本研究において利用した輸出入申告データのデータ項目やその理由、利用上の注意点等について解説をする。

I. 本研究で利用した輸出入申告データの種類について

本研究は財務省が貿易統計計上データのうち、貿易取引通貨が判明するデータを基に作成・公表している「貿易取引通貨別比率」だけでは把握できない、各貿易相手国別の取引通貨の比率を輸出入申告データから得ることに着眼して実施されている。こうした観点から、「一般輸出申告データ」及び「一般輸入申告データ」のうち、貿易統計の計上要件を参考に申告価格(関税課税標準額)が20万円を超える個票データに限定している。(外国貿易等に関する基本通達(以下、「統計基本通達」という。))21-2(1))

(※) この他「マニフェスト輸出申告データ」「マニフェスト輸入申告データ」も存在するが、これらは申告価格が貿易統計計上の要件を満たさない極めて小規模な取引であるため、本研究においては採用されていない。

厳密には、貿易統計では統計計上単位が1,000円(1,000円未満の端数は切り捨て)であることを踏まえ、申告価格が201,000円以上の個票データを利用している。(200,999円以下のものは分析対象から捨象。統計基本通達9-2。)

II. 利用したデータ項目と利用上の注意点について

本研究では、①貿易相手国別の②インボイス通貨シェアを③金額・取引件数ベースで④毎年上期下期別に集計した表を作成している。このため、個票データから、

- ① 貿易相手国はどこなのか
- ② インボイス通貨は何なのか
- ③ 輸出入取引の金額・件数として参照すべき項目は何か
- ④ 輸出入申告の時期はいつかを把握する必要がある。これらを整理したものは以下のとおり。

要把握事項	採用データ項目	採用理由及び利用上の留意点
① 貿易相手国はどこなのか	(輸出)仕向国コード (輸入)原産国コード	貿易統計における貿易相手国は、輸出の場合は仕向国、輸入の場合は原産国とされている。 (統計基本通達7-2)
② インボイス通貨は何なのか	(輸出入共通)インボイス通貨コード	輸出入取引において、建値通貨はインボイスに記載される。輸出入申告にあたって、インボイスに記載された通貨に相当するコードが入力されている。
③ 輸出入取引の金額・件数として参照す	(輸出)申告価格 (輸入)関税課税標準額	貿易統計に計上される価格の基となる価格。(貿易統計への計上にあたっては、1,000円未満を切り

べき項目は何か		捨てる形で端数処理される。)
④ 輸出入申告の時期はいつか	(輸出)輸出申告年月日 (輸入)申告申請年月日	輸出入申告がなされた日に基づき、毎年上期下期別に集計。

Ⅲ. 終わりに

輸出入申告データを含む行政データを学術研究で利用するためには、個々のデータが行政事務でどのように収集され、業務上の利用においてどのように解釈されているかを把握することが重要である。研究者にとっては、研究・分析の目的に必要な情報を行政事務に従事している職員等に予め確認・相談しておくことが肝要である。これに対し研究活動に参画する行政職員についても、研究者の視点に立ち、研究・分析の目的をよく理解した上で、利用すべきデータ項目や解釈に関する知見を提供することが求められる。

本研究のように共同研究という形式は、行政データが有する秘密保護の要請を担保するためだけでなく、研究者・行政職員の双方が持つ強みをデータ利活用に最大限に活かす手法となりうる可能性を秘めていることから、将来の研究においても、双方が手を携えて研究を遂行し、有益な知見を世に送り出すことを期待しつつ、本補論を輸出入申告データの利用手法に関する技術的な知見の蓄積の1つとして記す。

参考文献

外国貿易等に関する基本通達(蔵関第 1048 号昭和 59 年 10 月 17 日)

<https://www.customs.go.jp/kaisei/zeikantsutatsu/kihon/TU-S59k1048.pdf>